

平成五年一月三十一日発行

萬葉學會

卷一・二五番の天武天皇御製歌の成立過程について……………坂本信幸(一)

池主の“敬和歌”をめぐる……………大越喜文(三)

——天平十九年家持・池主の長歌贈答——

報告……………(五)

会員名簿補訂……………(五)

萬葉

第四百四十五號
平成五年一月

第四百四十四號 目次

日本靈異記と続日本紀……………小泉道

古事記上卷、岐美二神共に生める

「嶋・神参拾伍神」考……………毛利正守

宴の席——意吉麻呂の物名歌……………浅見徹

会員名簿補訂

卷一・二五番の天武天皇御製歌の成立過程について

坂 本 信 幸

万葉集卷一には、天武天皇の御製歌として次の歌と或本歌を残している。

天皇御製歌

Aみ吉野の耳我の嶺に 時なくぞ雪は降りける 間なくぞ雨は降りける その雪の時なきがごと その雨の間なきがごと
隈もおちず思ひつつぞ来る その山道を (1・二五)

或本の歌

Bみ吉野の耳我の山に 時じくぞ雪は降るといふ 間なくぞ雨は降るといふ その雪の時じきがごと その雨の間なきがごと
隈もおちず思ひつつぞ来る その山道を (1・二六)

これらの歌については、周知のごとくその成立過程について論議がある。即ち、二五番の作には、二六番の或本の歌の他に、卷十三にも

C小治田のあゆぢの水を 間なくぞ人は汲むといふ 時じくぞ人は飲むといふ 汲む人の間なきがごと 飲む人の時じきがごと 我妹子に我が恋ふらくは 止む時もなし (13・三二六〇)

Dみ吉野の御金が岳に 間なくぞ雨は降るといふ 時じくぞ雪は降るといふ その雨の間なきがごと その雪の時じきがごと 間もおちず我はぞ恋ふる 妹が直香に (13・三二九三)の異伝ないし類歌が見え、それらの関係が論議されて来たわけである。この作にはこの他にも、都倉義孝氏(「耳我の嶺の山道——万葉集二五番歌の構造と背景——」『国文学研究』第四十八集)が整理されたように、(1)結句の「念乍叙来」の「来」をコシと訓むのがよいのか、クルと訓むのがよいのか、(2)それと関わって「其山道」は回想の場面なのか、眼前の景なのか、(3)また、「念」の内容は恋情なのか、天武吉野隠遁の折の憂悶なのか、(4)この歌が作られたのは何時か、(5)はたして天武の実作か、或いは仮託か、と

いった問題がある。いずれも、この歌を理解する上で重要な問題であるが、問題が多岐にわたることによってかえって混乱することも考えられ、とりあえずは四首の歌の関係についての私見を述べて見たい。

二

四首の関係について、松田好夫氏（「問答歌成立の一過程」『万葉研究新見と実証』）は、四首がいずれも「十三句であり、同一構造の上に、類似の語句、類似の表現を持つてゐる」ことから、「同じ曲節によつて歌はれた民謡であつて、相互は民謡としての伝誦的関連によつて結ばれてゐる」と考えられ、近江朝以前に吉野地方に成立した二五番が、やがて大和の平原地方に伝播し、二六番となり、それが伝播が久しくなり新鮮味を失つて内部的に変化し、三二九三番になり、その替歌として三二六〇番が成立したとし、次のような関係を考えられた。

A ↓ B ↓ D ↓ C

その後、沢瀉久孝氏（『万葉歌人の誕生』「天武天皇の御製」）は、この松田氏の見解を踏まえ、その批判のもとに、BCDの各歌の結句を比較し、

……(B)(C)(坂本注―本稿のABに当たる)にあつては「その山道

を」来るのであるから、その道の「隈もおちず」のある事は当然に認められるが、(D)(坂本注―本稿のD)にあつては「妹がたゞかに」「恋ふる」のであるから、既に「間なきが如」「時じきが如」とある句からつゞけばよいのであつて、「間もおちず」を重複する必要はない。これは(B)(C)の形式を模倣した為に「隈もおちず」に相当する句を入れようとして、なくてよい拙い句が挿入せられる事になつたので、(D)が(B)(C)の追随歌であることはこの一事を以てしても明らかである。

C --- A ↓ B --- D

として、
という関係を考えられた。西郷信綱氏（『万葉私記』「八 天武天皇」）も、C ↓ A ↓ B ↓ Dの過程を主張し、BはAの歌謡化しつつある姿であり、Dはさらにそれが進んで、「相聞歌謡の域にふたたびまいもどつていった姿を示す」とされた。

また、戸谷高明氏（『古代文学の研究』「万葉集二五番『天皇御製歌』」）は、「類歌中、御製と目されている歌は最も新しい位置にあるもので、この〔A〕が再び伝承歌として流布したというコースは納得し難いと思う」として、

C ↓ D ↓ B ↓ A

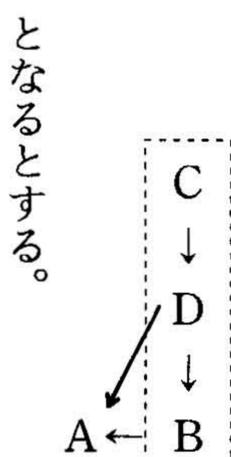
の関係を考えられた。

都倉義孝氏(前掲論文)も、 $B \rightarrow A$ の過程を主張され、 $A \cdot B$ が卷十三などから転用改作されたことは動かないとしつつ、「同じ天武歌とされる両歌でも、その民謡的発想をより多くとどめた或本歌が仮託改作の原形で、二五番歌は、これをより一層個人詠に仕上げたものと思われる」とし、

$C \cdot D \rightarrow B \rightarrow A$

の過程を考えられ、露木悟義氏(「天武御製の性格」『万葉集を学ぶ』第一集)がそれを支持しておられる。

森淳司氏(『万葉とその風土』「天武天皇歌の課題」)は、二五番歌を正真の天武自作歌とすることに疑問を投げ掛け、四首の表記の検討から二六番は卷十三の二首と同一ないしは極めて近い関係にある資料から採られたものであろうとし、「この四首は民謡で、しかも三二六〇がもとで、それが吉野へ流れて三二九三となり、『耳我の山』と変貌した時点で『その山道を』と結ばれる形が生まれたものと思う」とされ、図示すれば、



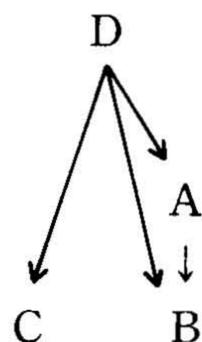
吉井巖氏(「卷十三長歌と反歌」『万葉集を学ぶ』第六集)は、 $A \cdot B$

卷一・二五番の天武天皇御製歌の成立過程について

とDとの先後関係については沢瀉氏の説に従うべきとしつつ、Dがその成立にあたってCを参考にしたならば、「間もおちず」の句がCの形式によって修正されえたのでないかとして、 $C \rightarrow D$ の関係を否定し、Dは $A \cdot B$ の流伝のなかで、その思いが恋の意に解され再び民謡化したものとし、 $A \cdot B$ の先後についても、Bが初案、Aが定稿と考えられた。図示すれば以下のごときであろうか。

$C \rightarrow D$
 $B \rightarrow A$
 D

阪下圭八氏(「初期万葉」『天武天皇の吉野の歌』)もBを初稿形態、AがBを推敲しての完成形態ととらえられるが、阪下氏は $B \cdot A$ の源泉にCのみでなく、もう一つの歌Xを想定される点が異なる。曾倉岑氏(「天武御製歌と周辺の歌」『国語と国文学』昭和57年11月号)は、沢瀉説のCが最初であるとする点、BよりDへ変わったとする点に疑問を提出し、Cが伝聞的表現をとっているのは、伝聞的表現を持つ他の歌謡の影響の下に、その替え歌のような形で成立したのであろうと推定し、それをDとして、四首の関係を次のように考えられた。



三

このように諸説紛々としており、いずれにも決しがたい状況であるが、これらの説をおおまかに整理すると、(1) A・BからDが成立したとする説と、(2) DからA・Bが成立したという説とに大きく分かれる(AとBの先後は今問わない)。前者は、松田、沢瀉、西郷、吉井、阪下の諸氏の説、後者は、戸谷、都倉、露木、森、曾倉の諸氏の説である。もちろん、Cの取扱やAとBの先後の問題他さまざまな点でそれぞれに異なるが、一応はこのようにおさえてみてさしつかえないであろう。

そこで、この点についてまず考えてみるに、私にはDがA・Bより先とはその表現の上から考え難いのである。その理由は二点ある。一つには、Dの結びの「我はぞ恋ふる 妹が直香に」の表現のもつ新しさである。一体に直香に恋うとはいかなることであろうか。タダが、直接にほかならぬそのものを指す意であることには問題はない。「香」とは何であろうか。全註釈には「カはアリカ、スミカなどのカで、タダはまさしき存在をいう」とし、古典大系本は「カは香の意か、或いはアリカ(在処)のカか」とし、沢瀉註釈は管見に「香は、ものをほむるには、何にも香といふなり」というのをあげて、「香」はもののエスプリをさすもので、

男女の恋は何と云つてもからだぐるみなのが自然である。そのからだぐるみの彼と彼女とを君が直香といひ、妹が直香といふのだと私は考へるがどうであらうか。

とし、訳語としては「いつそ直香のまゝでおきたいやうな気がするのである」と述べられている。また、全集本では「タダカの原義はその人固有のかおり、転じて、その人を表す」とし、全注(木下正俊氏担当)もそれによっている。「時代別国語大辞典 上代編」には「カは、シラカのカと同じく、そのものの精粹・本体などの意ではなからうかとし、そこから君や妹というのとほとんど同じく、その者をさし当てて言う語とする説がほぼ妥当であろう」と言っているのは、注釈の説によったものとみえ、『岩波古語辞典』に「カはアリカ(在処)のカに同じ」というのは、全註釈によるものであろう。松本剛氏(「カグハシ考」『万葉』第九十九号)が、カとは現代人の感覚からすると理解しにくいもので、「五感にとらわれない、古代人に与えられた独特な感覚によつてのみ正確に把握できる、『靈妙な』性格を持つものであった」とする解も、橋本四郎氏の「カは嗅覚で感覚しうるものを含んだ、直接に接した対象から発散されるエキスかスピリットのようなものをさす語とはいえないか」という教示を「まさにその通りだと思ふ」と紹介していることから考えて、注釈の説に沿った理解と言

える。

ただ、松本氏が万葉のカグハシを呪的方向にやや偏つて理解するのは、カグハシの集中例が、「橘」四例(10・一九六七、18・四一一、四一六九、20・四三七二)、「梅」一例(20・四五〇〇)、「君」一例(18・四二二〇)¹⁾と殊に香りの高い植物である「橘」「梅」にしか見られないことや、橘にしても呪性の強い「木の實」でなく、「香細寸花橘を」(一九六七)、「咲きにはふ花橘の香吉」(四一六九)、「(橘の)初花を枝に手折りて をとめらに裏にも遣りみ 白たへの袖にも扱入れ 香具播之美」(四一一二)と、その香り高い花橘について言い、或いは「橘の下吹く風の可具波志伎」(四三七二)と橘の下を吹く香を運ぶ風についてカグハシと言っていることからして、如何であろう。氏は

梅の花香を加具波之美遠けども心もしのに君をしぞ思ふ

(四五〇〇)

のカグハシミを取り上げ、梅の香りのよさを詠んだものでないように論ずるが、ここも「梅の花香をかぐはしみ」と花の香についてカグハシと語っていることからして、間違いないであろう。氏はこの歌の歌われた天平宝字二年の中臣清麻呂の宅での宴歌の配列では、前後に「今日の主人は磯松の常にいまさね今も見ること」(四四九八)とか、「八千種の花は移ろふ常磐なる松のさ枝をわれ

は結ばね」(四五〇一)とか、常緑の松のめでたさにより主人の長寿を祈っていることから、「前後三首の歌は、明らかに古代信仰の世界に深い繋がりを持っている。そうした歌群の中にあつてはたして(3)のa(坂本注、四五〇〇のこと)のみが前後と無関係に存在しうるであろうか」とし、「『梅の花香乎加具波之美』の語句もまた呪術信仰、就中、人間の生命と深い連繋を持つものとして理解するのが穏当であると思う」とされるが、「八千種の花は移ろふ」と歌われる「八千種」の花の一つである梅をもって「君をしぞ思ふ」と歌った歌が、どういう具合に「呪術信仰、就中、人間の生命と深い連繋を持つものとして理解」されうるのであろうか。この宴歌で、梅は四四九六、四四九七、四五〇二番とその散りゆく美が歌われている。ただ前後の三首だけを捉えて、しかも一首として十分に解釈できない方向で語句を理解するのでは納得を得まい。この歌は客の主人に対する挨拶として歌われた一首で、

天雲のそきへの極み遠けども心し行けば恋ふるものかも

(4・五五二)

雲の上に鳴くなる雁の遠けども君に逢はむとたもとほり来つ

(8・一五七四)

海原の遠きわたりをみやびをの遊びを見むとなづさひぞ来し

(6・一〇一六)

などと同じように、遠イケレドモ特別ナ思イガアルカラ、という意で相手を讚美する表現である。一五七四、一〇一六番ともに宴歌であることも注意していい。つまり、四五〇〇番は市原王が主人中臣清麻呂に対して「梅の花の香がかぐわしいので、遠く離れていきますけれども、心もしみじみとあなたのことを思っておりま

す」と梅の花の香りの良さを主人の人柄の良さに譬え、あなたの人柄が良いので、遠い所に住んでいるけれど何時もあなたのことを思っています、だから今日は遠いけれど来たのです、と讚美の挨拶を述べたのである。小島憲之先生（『上代日本文学と中国文学』下巻一三三五頁）が「宴歌と云ふ味気ない挨拶的儀礼的な表現の中に、『梅の花香をかぐはしみ』と詠じたことは、むしろ当時すでに梅の香を愛好する一般的傾向を暗に示すものではなからうか」と述べておられたのが正しいといえる。カグハシの用例がほぼ四期に集中することも考えるべきである。

また、注意すべきはカグハシの用字が、四三七一番と四五〇〇番の二例を除いて、「かづらかげ香具波之君」（18・四二二〇）のように、香りを意味する「香」の字をとることである。しかも、四五〇〇番の例は、「宇梅能波奈香乎加具波之美」とあれば、他の用字と同様「香」の意識があったと考えてよいものである。四三七一番が「香」の字を用いないのは、これが仮名書きの巻の、し

かも防人の歌であることと関係があろう。

集中三例のカの例、「秋の香のよさ」（10・二二三三）、「橘のほへる香かも」（17・三九一六）、「梅の花香をかぐはしみ」（四五〇〇）においても、揃って用字は「香」をとり、「かおり」の意である。そして、三九一六は天平十六年、四五〇〇は天平宝字二年の作であり、作者未詳の二二三三も「高松」の地名から奈良遷都以後の作と考えられ、その用例は四期を中心としていることも注意される。

つまり、カの原義が、嗅覚で感覚しうるものを含んだ、直接に接した対象から発散されるエキスかスピリットのようなものをさす語であり、五感にとらわれない、古代人に与えられた独特な感覚によってのみ正確に把握できる、「靈妙な」性格を持つものであったとしても、「香」という文字との結び付きによって、かおりの意味が強くなり、万葉のカやカグハシなどの用例においては、かおりの意味に傾いていたものと考えられる。

カはその人固有のものであり、その人に纏わり付いて離れないもので、それによりその人の魅力や雰囲気形成されている。それ故タダカはその人そのものを表しもし、その人の様子・状態を表しもするのであろう。卷十三の他のタダカの例である

聞かずして黙もあらましを何しかも君が正香を人の告げつる

(13・三三〇四)

……狂言か人の言ひつる 我が心つくしの山の 黄葉の散り

過ぎにきと 君が正香を (13・三三三三)

が、様子・実情といった意になるのはこのようなことによる。

ただ、このようにタダカヲ告グ、或いは言フの場合の、様子・実情といった訳が当てはまる例と違い、Dの例は「妹が直香」に恋フのであり、そこに「香」の文字の正訓性が意識され、発想の新しさを感じざるをえないのである。卷十三以外の例である

我が聞きにかけてな言ひそ刈薦の乱れて念ふ君が直香ぞ

(4・六九七)

……冬の夜の明かしも得ぬを 眠も寝ずに我はぞ恋ふる 妹

が直香に (9・一七八七)

の二例が、六九七番は相伴宿祢像見の作、一七八七番は笠朝臣金村之歌中出の天平元年十二月の作といずれも新しい年代の作であることも考え合わせてよい。³⁾ タダカ³⁾の原義は、そのものの精粹の意を含むにしても、Dや六九七番、一七八七番の例は、他ならぬその人固有のかおりと考えてよいのでないか。タダカそのものの表記にしてからが、「正香」三例(13・三三三三、三三〇四、三三三三)、³⁾「直香」二例(4・六九七、9・一七八七)と、「香」の字を用い、正訓字意識が強い。「タダ——」という構成の語の集中例が、

仮名書きの卷以外は全て正訓字を用いていることも注意してよ

い。⁴⁾

「我はぞ恋ふる」の句を倒置させ、その対象を結句に導く表現は他に

相思はず君はまさめど片恋に吾はぞ恋ふる君が姿に

(12・二九三三)

あしひきの山菅の根のねもころに吾はぞ恋ふる君が姿に

(12・三〇五一)

があるが、これは「君が姿」であって、「君」そのものではない。その「姿」にあたるものが「直香」なのであって、今の場合の「直香」は君或いは妹そのものというのでは表現としておかしいのでないか。これから考えると「直香」は「姿」と同じ意に用いられているように思える。しかし、「直香」は「直香」であり、「姿」の集中例が三十二例の多きにわたるのに、わざわざ用例の少ない「直香」を用いたところに、微妙な意味の相違を考えなくてはなるまい。万葉人が好んで読み、影響を受けたとされる『遊仙窟』の中に、張郎が十娘に手紙を書いて

遙聞³⁾香氣³⁾、獨傷³⁾韓壽之心³⁾、近聽³⁾琴聲³⁾、似³⁾對³⁾文君之面³⁾。

と、相手の香りを聞き、相手に恋う場面が見えるが、このように

恋の相手の香りを表現する例は他にも、張郎の恋の告白に遂に十娘が張郎の前に姿を表す場面にも、

薰香四面合 光色兩邊披

艷色浮粧粉 含香亂口脂

迎風幘子鬱金香 照日裙裾石榴色

徐行步步香風散 欲語時時媚子開

などに見えて、十娘の美しさの表現となっている。また、五嫂の詠んだ詩に

新花發兩樹 分香遍一林

とあるのは、兩樹が二人の女性の譬えであり、「香」はそれぞれの女性の魅力をいう。同じく張郎の答えた詩に

暫遊雙樹下 遙見兩枝芳 向日俱翻影 迎風竝散香

とある「芳」「香」はその二人の女性の魅力をいうもの。

試從香處覓 正值可憐花

と芳しい香りのところに降りてみたら、可憐の花、つまり十娘に会ったというのも、「香」を美女の象徴とした表現。張郎と十娘の愛し合う場面にも

花容滿眼 香風裂鼻

と十娘のなやましさを表現する。

こういった「香」を恋の相手の象徴とする表現は、『玉台新詠』

にも多く見え、⁽⁵⁾『文選』にもこのような例は「芳」の字ではあるが見え、

同瓊珮之晨照 共金爐之夕香 君結綬兮千里 惜瑤

草之徒芳(第十六卷、江淹「別賦」)

と見える瑤草の香は残された妻の美しさの譬え。

江離生幽渚 微芳不足宣(第二十八、陸機「樂府十七首」

の「塘上行」)

は「芳」に娘の美を譬える。

「直香」に恋うという表現は、或いはこのような漢詩文の「香」の表現の影響などから生まれて来たものでないかと思われるのである。

理由の二つ目は、「間もおちず」という表現に対する疑問である。沢瀉氏が、Dの「間もおちず」の句はDにあって不要の句であり、「間なきがごと」「時じきがごと」から直接「我はぞ恋ふる妹が直香に」に続けばよいものを、「間もおちず」と重複したのは、ABの形式を模倣したために「隈もおちず」に相当する句を入れようとして、なくてよい拙い句が挿入されたのだと述べられたことを、もう少し深く考えて見てよい。つまり、万葉の表現として、「間もおちず」というのは落ち着かない表現なのである。

集中の「間」という語の用いられた歌を具に検討するに、Dの

他に「間もおちず」というような表現は例を見ない。「間」が空
間の意でなく時間の意に用いられた例では、当面の四首を除いて、

間守ル(11・二五六一、二五七六、二五九一)：三例

間ナシ(3・四二〇)：一例
である。

間ナシ(3・五三九、七〇二、七六〇、6・一〇四七、8・一五五

三、一五八五、一五九四、10・一八九八、二一九六、11・二五四

四、二七四六、二七五二、12・三〇二二、三〇一六、三〇八七、

三〇八八、三一六八、三二七三、15・三六六〇、17・三九六一、

三九七三、四〇二七、18・四〇三三、20・四三三六、四四六一)

：二十五例

雨間置ク(8・一四九一、一五六六、12・三三二四)：三例

雨間明ク(10・一九七一)：一例

のような表現をとる。「間」(アヒダ)の例を加えても、

アヒダ置ク(4・五三五、11・二七二七、二七九三、12・三〇四六、

15・三七八五)：五例

アヒダナシ(4・五五一、六二一、11・二七三六、二七三七、12・

三〇二九)：五例

アヒダアル(11・二七四一)：一例

である。さらに空間的表現を加えても、

間遠シ(間遠) (3・三〇二、四一三)：二例

間近シ(4・五九七、六四〇、6・九八六、14・三五二四)：四例

絶える時なくしよつちゅう恋うという意を表わすには、「間ナ
シ」という語を用いるのが万葉人の表現であったといえる。

「落つ」の時間に言った例は、

一夜(12・二四八二、15・三六四七、三七三八)：三例

全夜(12・三二二〇)〔ヒトヨと訓む説もある〕：一例

一日(15・三六五二、三七五六)：一例

寝ル夜(1・六、13・三二八三、17・三九七八)：三例

などの語を受けており、その落つ対象が、夜とか日とか教えるこ

とのできる一定の範囲をもった限られた時間である点に、「間」

と相違がある。やはり、「間もおちず」というのはおかしい表現

なのである。

うち渡す竹田の原に鳴く鶴の間なく時なし我が恋ふらくは

(4・七六〇)

恋衣着奈良の山に鳴く鳥の間なく時なし我が恋ふらくは

(12・三〇八八)

衣手の真若の浦のまなご土間なく時なし我が恋ふらくは

(12・三一六八)

などを見ても、Dは「その雨の間なきがごと その雪の時じきが

ごと」から直ちに「我はぞ恋ふる妹が直香に」に続けばよい。それをわざわざ「ま(間)もおちず」と加えたのは、それが「くま(隈)もおちず」を言い換えることによつて生まれた特異な表現であつたからと考えざるを得ない。夙く井上新考に「今の歌は少くとも長歌に堪能ならざる人の此天武天皇の御製の末をすこし更へて自己の歌とせるなり。さればこそ間モオチズなど手づつなることを云へるなれ。元来此歌は間ナクと時ジクとを相對したるなればそれを束ぬるに当たりて一方に偏りて間モとはいふべきにあらざるなり」(傍線、坂本)と述べていた意見に耳を傾けるべきであつた。つまり、沢瀉氏がいう、A・BからDへという流れが正しいと言わねばならないのである。

曾倉氏(前掲論文)は、「同じ論法を沢瀉説が四首の最初とする(C)の歌に適用したらどうなるであろうか。『吾妹子』に『わが恋ふ』のであるから、既に『間無きが如』『時じきが如』とある句から直接続けばよいのであつて『止む時もなし』を重複する必要はない」といわれるのは、理屈ではあるが、「間なきがごと時じきがごと我は恋ふ」と述べるのに、さらに「間もおちず」を介在させ、既に「間なき」「時じき」と言っているのに「間」のあるごとく(間を落とすことなくと述べるとはいへ)表現するのでは、やはり、不自然と言わざるを得ない。恋の思いの表出にあたっては、

「間」なく何時も恋うというのが自然であつて、「間」の存在を想定して、その「間」も落とさず恋すというのは万葉人の恋の心とは遠いものでなからうか。「止む時もなし」を重複させることは、それと違つて、「その雨の間なきがごとその雪の時じきがごと」を受けて「止む時もなし」と述べるのであつて、

……ひさかたの天見るごとく まそ鏡仰ぎて見れど 春草の
いやめづらしき 我が大君かも (3・二三九)

……露霜の消ぬるがごとく あしひきの山道を指して 入日
なす隠りにしかば…… (3・四六六)

うけ沓を脱き棄るごとく 踏み脱きて行くちふ人は 石木よ
り生り出し人か…… (5・八〇〇)

三国山木末に住まふむささびの鳥待つごとく 吾待ち瘦せむ
(7・一三六七)

国遠み思ひなわびそ風のむた雲の行くごとく 言は通はむ
(12・三二七八)

……高山の嶺のたをりに 射目立ててしし待つごとく 床敷
きて吾が待つ君を 犬な吠えそね (13・三二七八)

などと同じ形であつて、「止む時もなし」はあつてしかるべき句といえる。⁽⁶⁾

四

以上のように、「間もおちず」という変な表現をとったのは、「隈もおちず」に相当する句を入れようとしてであったと思われるが、それはDの歌において「隈もおちず」という表現が不要と思われたからであった。A・Bにおいては「その山道を」来るのであるから「隈もおちず」が必要であったけれど、「妹が直香に」恋うのに「隈もおちず」ではおかしい。ただ、そこで考えるべきは、A・B(今はAとBのどちらからDが生まれたかは問わない)からDの相聞に転化するにあたって、Cのような「間ナキガゴト時ジキガゴト恋フ」という表現に変化する方向がとられたこと、その時「隈もおちず」の句が邪魔になったこと、そして、邪魔ではあるが「間もおちず」という不自然な表現にしてまで「隈もおちず」にあたる句を残したことの意味である。

不自然な表現にしてまで句を残したのは、音数の問題もあろうが、おそらくはA・Bいずれかの歌が伝誦歌として相当に傳播していて、或いは松田氏(前掲論文)のいうように一つの曲節をもって歌い伝えられてもおり、「隈もおちず」にあたる句を欠落させるのが、転化にあたって不都合であったからではないか。そういった伝播のことを考える時に、「時なくそ……時なきがごと」「雪は

降りける……雨は降りける」とあるAからDよりも、「時じくそ……時じきがごと」「雪は降るといふ……雨は降るといふ」とあるBからDに変化したと考えるのが流れとして自然ではなからうか。⁽⁷⁾

Dに転化するにあたって、Cのような表現に変化する方向がとられたことは、「間ナク時ナク恋フ」という表現が前掲の七六〇番や三〇八八番、三一六八番などに見られるように一般的類型的表現であったからに他ならないであろう。「間ナシ」に「恋フ」や「思フ」が続く例は、「梶とる間なき恋もするかも」(11・二七四六)、「さざれ波間なくも君は思ほゆるかも」(12・三〇一二)、「寄する波間なくや妹に恋ひ渡りなむ」(15・三六六〇)など甚だ多く、また、「時ナシ」に続く例も、「川音の止む時なしに思ほゆる君」(6・九一五)、「打ち麻かけ績む時なしに恋ひ渡るかも」(12・二九九〇)、「時なしに思ひ渡らむ息の緒にして」(12・三〇四五)のように多い。Dが相聞歌謡として一般化類型化してゆく中で、「隈もおちず」の句が不要になったのは、前述のように「間ナシ時ナシ」の表現においては直ちに「恋フ」もしくは「思フ」に続けばよいからであるが、それ以前に「間ナシ時ナシ」の恋の表現類型に、「隈もおちず思ひつつぞ来るその山道を」の句が異質なものであったからに違いない。間断なく恋い思うという表現

において、「隈モオチズ」「山道ヲ辿ル」という表現は余分なものといえる。こういった表現がとられているのは、Aの天武天皇御製歌とBの或本歌でしかないことがそれを物語る。

つまり、A・Bの歌は「間ナシ時ナシ」の表現の型と、

……味酒三輪の山 あをによし奈良の山の 山のまに隠る
まで 道の隈い積もるまでに つばらにも見つつ行かむを
しばしばも見放けむ山を 心なく雲の 隠さふべしや

(1・一七)

大君の命かしこみ にきびにし家を置き こもりくの泊瀬の
川に 舟浮けて我が行く川の 川隈の八十隈おちず 万たび
かへり見しつつ 玉梓の道行き暮らし……

(1・七九)

……この道の八十隈ごとに 万たびかへり見すれど いや遠
に里は離りぬ いや高に山も越え来ぬ 夏草の思ひしなえて
偲ふらむ妹が門見む 靡けこの山

(12・一三二)

……漕ぎたむる浦のことごと 行き隠る島の崎々 隈もおか
ず思ひそ我が来る 旅の日長み

(6・九四二)

……幸くあらばまたかへり見む 道の隈八十隈ごとに 嘆き
つつ我が過ぎ行けば いや遠に里離り来ぬ いや高に山も越
え来ぬ 剣太刀鞘ゆ抜き出でて 伊香山いかに我がせむ
行くへ知らずて

(13・三三四〇)

などに見られる家郷を離れて旅行く者の、家郷や家郷の妹に対する思いを歌った旅行きの歌の表現の型とを持っていると言える。逆に言えば、AやBは二つの類型を組み合わせる形で形成された歌であると言えよう。

それ故、もしCからAもしくはBが生まれたとしても、単純にそういった過程だけでなく、旅行きの歌の表現の型をもった或歌(X)の影響といったものを考えなければなるまい。阪下氏(前掲論文)が、

「小治田の年魚道の水」がおのずから(傍点原文)、「み吉野の耳我の嶺」にいいかえられたとはいえないし、さらにそれ以上「我妹子に……止む時もなし」と「隈もおちず……その山道を」との間には大きな飛躍がある。

として、B・Aの祖型としてCを考える他にもう一つの元歌Xを想定されたのは、こういった点において炯眼といえようが、それを天智紀十年十二月条の天智天皇が病没した記事に続いて出てくる童謡中の一首、

み吉野の 吉野の鮎 鮎こそは 鳥辺も良き え苦しゑ 水
葱の下 芹の下 吾は苦しゑ

(紀二二六)

とされたのは、童謡を吉野隠遁時の天武の苦の暗喩と見て、A・Bを天武内面の苦を映し出した作と考えられるその表現の奥にあ

る問題は別として、歌の表現形式から見て首肯しがたい。

ところで、Bの或本歌は左注に「右句々相換 因_レ此重載焉(右は句々相換れり。これに因りて重ねて載す)」とだけ記されていて、句を異にする旨の注記だけであつて、作者についての注記はない。吉井氏(前掲論文)の指摘するように、巻一、巻二の注記の例からしてこの場合作者についての伝承は同じであつたと見るべきであるから、A・Bともに天武天皇作と伝えられていたはずである。その天武天皇御製とされる歌だけが、間ナク時ナク恋フという型と旅行きの表現の型の二つの型を一首に詠み込む形で作られていたとなると、その意図が考えられなくてはなるまい。つまり、これらがその型の通りに恋の歌であつたならば、他の多くの歌がそうであるようにどちらかの型で歌えばよいわけであつて、そうしないで二つの型を詠み込んでいったところに、これらの歌の創作意図があると考えられる。そして、これらの歌がCとの類歌関係を持つこと、Dに流伝変化していくことを考え、その表現の大半が間ナシ時ナシ形式に占められていることを考えると、自ずとその意図が見えてこよう。敢えて「隈もおちず思ひつつぞ来るその山道を」と歌つたのは、これらの歌に天武天皇の山道を辿る設定が必要とされたからであろう。

A・Bの歌句の「思ひつつぞ来る」の思ひの内容については、

夙くから諸説があり、それらは、次のように大きく分かれる。

I 吉野の自然を愛でるとするもの。(管見、代匠記、考、略解、その他)

此心は、吉の、幸有道の、はるかにてくま／＼おほかれと、そのくま／＼ことに、御心をとめて、思しめすトいふ心也。よしの、山をほめて作れる御歌なり。(管見)

思ツ、ソクルハ、早至リテミハヤト思召、路次ノ御意也。

(代匠記)

II 壬申の乱に関する物思いとするもの。(拾穂抄、僻案抄、次田新講、その他)

此御哥はかのよしのおはしける程、大事をさま／＼思慮せさせ給ふ心なるへし。(拾穂抄)

此御製は安まるのはかりごとにて、東宮を辞し給ひ、出家し給ひて、はじめて吉野山に入たまへる時の御歌とみへたり。故に山道につきて、隈もおちずなど、天下の治乱をも心にかけたまへるなるべし。(僻案抄)

III 恋の思いとするもの。(古義、井上新考、総釈、その他)

もしくははじめ天皇吉野ノ宮に大坐々ける間、女の許に通ひ賜ひしことの有りて、其ノ時によみたまへるにや、かにかくに恋の大御歌とは聞ゆるなり。(古義)

此御製は春満季吟などの説に東宮を辞して吉野に入り給ひし時のとせるを古義に恋の歌とせるは活眼なり。東丸等の説は史実に泥めるなり。若モヒツツゾクルの八字に後世の註者の穿鑿する如く重大なる意義あらば皇太弟は此御歌の流布すると同時に命を奪はれ給はまし。歌は時人の耳を欺き、しかも後人の心に通ずるやうにはよまれぬものぞかし。

(井上新考)

この他に、『万葉集燈』のように「もと此芳野に入らせたまひしには、深き御たばかりありての事なりければ、はゞかり給ひて、恋の御歌かともみゆるように、かくあそばししにや」と、表面はIIIで裏はIIと解する説や、山田講義のように、

史に記す所の如く、御即位後吉野行幸の事真に一度なりとせば、かの耳我嶺の御製も亦この途上の御詠と見ざるべからず。然るにその調頗る沈鬱にして寧ろ悽愴の感あらしむ。惟ふにこの行幸(坂本注、天武八年五月の吉野行幸)は国家皇室の前途の為に一大決心を以て特に行幸ありしにて、その途上物思ひに沈みたまひし折の御製はかの耳我嶺の御製にして、その事解決して御心豁然となりたまひし折の御製はこの御製(坂本注、二七番歌)なるべく思はる。

として、天武天皇即位の後、国家皇室の前途を憂慮した物思いと

する説もあるが、概ね三説に分かれるといつてよい。

この中で最も多く支持されているのはIIの説である。

Iの説は前掲の「隈」を歌う用例の型からして、間違いであること言うまでもない。山田説の国家皇室の前途を憂慮したという考えも、「隈」を歌う用例の型では残してきた家郷や家郷の妹への思いを歌うのであるから、思いの方向が逆であり成り立たない。IIIの説は考えられはない説であるが、それならば何故に通常表現によらず二つの型を詠み込まなくてはならなかったのかが判らない。また、天武が都を後にし、妻を残して悲痛な恋の思いに旅の山道を辿らなくてはいけないような状況を考えがたい。諸注の支持するIIの説においてこそ、二つの型を詠み込んだ理由が説明できるのである。

大海人皇子は、天智天皇十年十月十九日近江の都を後にし、思いを都に残したまま吉野への山道を辿り隠遁したわけであるから、その思いの表現に旅行きの型を採り入れることは至当と言えよう。むろん、その時の大海人皇子の心の中にはこれからの壬申の乱を迎えるにあたっての様々な思いも去来したであろう。しかしながら、吉野入りの時の心情の実際は、天智の病状の如何や、後に残してきた人々のこと、かくなるまでに至った近江朝の出来事のあるこれなど、その思いの中心は都にあったはずである。今後のこ

とに対する思いも都との関わりの上でのことである。しかも、それは一時も心を離れることのない思いであったろう。

「彼よし野へおはしける比も冬の事ときこし侍るに此の哥雪のさまもをのづから折にかなひ侍にや」と拾穂抄に述べるごとく、十月十九日は太陽暦では十一月二十九日に当たるので、奈良県内でも降雪の早い吉野地方には雪もしくは霽が降っていたと考えると差し支えない。金子評釈に「場所が仮令山陰の北向きであるにせよ、大和南部の気象としては、そんなに沢山雪の降るには、時季その物が早過ぎる」という批判があるが、奈良地方気象台に問い合わせたところ（浅利公望氏の示教による）、地球の温暖化の進んだ最近の一九六一年から一九九〇年までのデータの中でも、奈良の平野部においての降雪の記録として、一九七六年十一月二十九日の降雪が記録されている。まして、現在よりは寒冷であったろう天智十年の十一月二十九日の吉野の山嶺において、雪が降っていたとして早過ぎるとは言えまい。

耳我嶺がどこであるかは、『大和志』に「耳我嶺、在二窪垣内村上方一 山勢紆頗幽勝」と見える窪垣内（国樺村）にある山とする説、『萬葉考別記』の「後に金峰カネノミタケといふぞ即是なる事しるべし」と金峰山とする説、また、土屋文明の『続万葉紀行』に『多武峯略記』の「南は吉野の垣娥野岑を限る」と見える記事を引い

て主張する多武峯と吉野の界の細峠、龍在峠一帯の横嶺とする説、全注の天武の吉野入りの時は芋峠を越えた可能性が強いとして、芋峠一帯を擬する説などあるが、不明である。いずれ、吉野山嶺の中の高嶺であれば、大海人の吉野入りの時実際にその嶺に雪が降っていた可能性は十分ある。

西郷信綱氏（『万葉私記』）が、

「み吉野の、耳我の嶺に、時なくぞ、雪は降りける、間なくぞ、雨はふりける」は、作者の体験であると同時に、作者の「思ひ」すなわち情緒そのものなのであった。詩における比喩は、情緒の質をかえずにその客観的等価物をすばやく見出す方法であるが、ここも、耳我の嶺に雪や雨が時なく間なくふっているのは、たんに作者がそういう場所を歩いていることを指示するだけでない。大海人皇子が吉野入りしたのは、冬十月下旬ころであったから、現に山路には寒々と雪がふり雨がふってもいたであろう。しかしそれだけでなく、作者の心にも絶えまなく雪がふり雨がふりつつあったこと、つまりそういう「思ひ」の状態そのものの、これは表現であったはずであり、両者は説明的關係ではなく、いわば非同一の同一の關係にあるのだと思う。

と述べられたように、「時なくぞ雪は降りける 間なくぞ雨は降

りける」の情景描写は、作者の辿る山道の現実として歌われていると同時に、その現実性が間断ない思いの譬喩として、その思いの重大さ、厳しき、暗澹たる前途を感じさせる観念性を含んでおり、後句の心情表現に転換する前句の景物表現というだけでない前句後句の連関の深さが、一首の完成度を高めていると言つてよい。そういった点では、Bの或本歌の「時じくぞ雪は降るといふ間なくぞ雨は降るといふ」の方は「といふ」という伝聞の表現の持つ外面性により観念性は消極的にとどまり、作者の主體的な判断によるものでない点において後句との連関が薄くなつていゝ言つてよい。⁽⁸⁾Dの根本をなす間ナシ時ナシの型の恋の表現においては、本来的に前句は後句の恋の思いの間断のなさをいうための序としての働きを持つに留まり、前句の内容が譬喩として後句に及ぶ質のものではないことを考えると、「といふ」という語が使われていることと関係なく、その内容の質においてDはBに近いと言え、こういった点からも、Aからよりも、BからDへの変化の過程が自然であると言える。

ただ、「時なくぞ雪は降りける 間なくぞ雨は降りける」の表現において、大海人の吉野入りの当日の天候が実際に雪が降り、雨が降っていたかについて、金子評釈に

天武天皇は翌年の六月朔日まで殆ど半歳以上、この吉野山中

に龍居してゐられたのだから、山地に通有の雨雪の多量だつたこの期間の認識から出発したもので、只次句の「その雪の時なきが如、その雨の間なきが如」の前提的叙述たるにすぎない。

と述べておられる言は一考に値する。曾倉氏(前掲論文)の指摘のごとく、集中に雪と雨の両方が一首の中に詠み込まれた歌は稀であり、当面のA・B・Dを除いた以下の三例、

奥山の菅の根しのぎ降る雪の消なば惜しけむ雨な降りそね
(3・二九九)

風雜り雨降る夜の 雨雜り雪降る夜は 術もなく寒くしあれ
ば……
(5・八九二)

隱口の泊瀬の国に さよばひに我が来たれば たな曇り雪は
降り来 さ曇り雨は降り来 野つ鳥雉はとよむ 家つ鳥鷄も
鳴く さ夜は明けこの夜は明けぬ 入りてかつ寝む この戸
開かせ
(13・三三二〇)

の中で、最も当面の歌の雨と雪の叙述に近いものは三三一〇番であろう。曾倉氏が「『雪は』『雨は』の句はどのような状況かを正確に伝えようとしてではなく、困惑のさまを漠然と対句を用いて表現したに過ぎないとみてよいであろう」(前掲論文)と指摘のごとく、これは男が悲惨な状況と、逢会の時の短くなることへの心

焦りを述べて女を口説く、妻問い歌の型になる歌と考えられ、ここに歌われた夕ナ曇り雪降りサ曇り雨降ル情景は、悲惨な状況を述べるための表現であつて、歌通りに実際に雪と雨とが同時に降っている時に歌われたものと考えする必要はないものである。土橋寛先生（『鴨山』の歌とその周辺『万葉』第九十九号）の言われるいわゆる「喚情的言語」として理解すべきものと考えてよい。憶良の「貧窮問答歌」（八九二）の「風雜り雨降る夜の 雨雜り雪降る夜」も、どうしようもなく寒い夜の典堅を想像して歌っているわけであつて、このような風寒く、雨降り、雨に雪雜る夜は、実際にあり得る厳しい状況の極端を観念的に述べたまでである。

我が背子は待てど来まさず 天の原ふり放け見れば ぬばたまの夜も更けにけり さ夜更けて嵐の吹けば 立ち待てる我が衣手に 降る雪は凍り渡りぬ 今更に君来まさめや さな葛後も逢はむと……
(13・三二八〇)

或本歌曰

我が背子は待てど来まさず 雁が音もとよみて寒し ぬばたまの夜も更けにけり さ夜更くと嵐の吹けば 立ち待つに我が衣手に 置く霜も氷に冴え渡り 降る雪も凍り渡りぬ 今更に君来まさめや さな葛後も逢はむと…… (13・三二八一)
において、三二八〇番の「降る雪は凍り渡りぬ」が、或本歌で

「置く霜も氷に冴え渡り 降る雪も凍り渡りぬ」と相違を見せるのも参考となる。それぞれ実際のこととして受けとるべきものではないこと言うまでもない。

当面の歌においても、大海人の吉野入りに際して実際に耳我嶺に時なく雪が降り、間なく雨が降りしていたと考えなくてもよからう。雪か雨のいずれかが降る寒さ厳しい天候であれば、このように歌えたはずであるし、たとえ現実には雪も雨も降っていないなくとも、その時の大海人の思いの深刻さや暗澹たる前途の譬喩として観念的に降っていた嶺の雪・雨であつて差し支えない。初期の万葉歌としては、実際のことであると考えるのが素直であるだけの話である。私見では当日現実には雪は降っていたであろうと考えるけれども……。

五

Cの「小治田の年魚道」については、尾張国愛智郡の地名とする説と、大和国高市郡の地名とする説がある。

前者は、代匠記に「何レノ国ニ有ト云事ヲシラス。尾張ノ愛智郡ヲ、日本紀ニ八年魚市トアレハ、若ハ彼処ニヤ」とし、宣長は『古事記伝』二十七卷において、『続日本紀』神護景雲二年十二月甲子（二十四日）条に「尾張国山田郡人從六位下小治田連葉等八

人賜_ニ姓尾張宿祢_一と見えることを挙げて「尾張を小治田とも云しか、若然らば、即小治_ハにて、田に依れる名なるべし」とし、古義ではさらに詳しく「小治田ノ連は地名を氏とせる人なるべければ、小治田は、山田ノ郡にあることしられたり、さてその小治田といふは、もと広き地にて、愛智ノ郡の冷水の有りしあたりまで互_{カケ}て、呼るにぞありけらし」と述べる説で、万葉考、略解、野雁新考、窪田評釈、全註釈などがそれによる。

後者は、井上新考に「小治田はおそらくは卷十一(二四一六頁)〈坂本注、二六四四番の載る頁〉に小墾田ノ坂田ノ橋ノとあるヲハリ田にて大和国飛鳥の事ならむ」と述べ、『新撰姓氏録』左京神別上に「小治田宿祢、石上同祖、欽明天皇御代依_レ墾_ニ開小治田鮎田_一賜_ニ小治田大連_一とあるのに注目した説で、奥野健治氏が「小治田之年魚之水」(『万葉』第四号)という論文で、沢瀉新釈に「『あゆ道』即ち『あゆ』の地へ通ずる道、或は『あゆ』を通る道などの意」とされたのを承けて、『多武峯略記』(『群書類従』第四三六卷)第四の鎌足の墓地の四至を述べた条に、「要記(実性撰)云、……中略……、限_ニ北阿由谷、鷹取岑_一。後記(千満撰)云、……中略……限_ニ北鮎谷、棕橋河、孕女淵_一とあることに注目し、「元来飛鳥地方に『小治田』を冠した『年魚(鮎)』なる土地があり、其の『年魚』を『道』の名や、『田』の名や、『谷』の名に付

けた様子も見えるから、これを以て判断すると、それ相応な広さと普遍性とを具へてゐた地名であつたものと思はれる」と、資料を挙げてその地名の存在を確実にされた説で、総釈(斎藤清衛氏担当)、私注、大系、注釈、全集、集成他、西郷氏や阪下氏、吉井氏などがそれによる。

井上新考に「但もし尾張ノ愛智といふことならばただに小治之年魚道といふべく小治田とはいふべからず」と指摘したように、地名二つを「の」で結んで挙げる場合は、「大地名+小地名」という形で挙げるのが一般であり、山田郡の中の小治田の地名を愛知郡の上に冠することはありえず、愛知郡に互_ツっていたとしてもいづれ愛知郡の一地域をなすに過ぎない地名を上_ニ冠することはないし、「田」の語の有無も問題であり、これは大和国飛鳥の一地名と考えるのが正しかろう。五味保義氏(『万葉集卷十三考』『国語国文の研究』第二十二号)の言うように、卷十三の雑歌・相聞部は「大和近くの地名を有する作をはじめに置き次第に地方に及ぶ」順序で編纂されているということから考えても(これについては前掲奥野論文にも、ことに相聞部における地名に大和が多く、しかも殆ど飛鳥を中心とした地名であることの指摘がある¹⁰)、Cは三二五五〜三二五七の巨勢道を詠み込んだ歌群と、三二六三〜三二六五の泊瀬の河を詠み込んだ歌群との間に置かれているわけであり、

大和の飛鳥地方の地名とするのがよい。

松田好夫氏（『万葉研究新見と実証』「伝誦過程の問題」）のように、Cが「人は汲むといふ」「人は飲むといふ」という伝聞的表現をとっている点から、沢瀉論文（前掲「天武天皇の御製」）のいうように「岡本の宮の頃」「岡本の宮の程遠からぬところ」でCのような伝聞的表現の民謡が成立する筈がないとして、「若し飛鳥時代飛鳥地方に『年魚道之水』があるならば、当然Aのそれと等しく、直接的表現『人は汲みける』『人は飲みける』となるべきではなからうか」と指摘する批判もあるけれども、⁽¹¹⁾この場合の「といふ」は、森重敏先生（注8論文）のいわれる「『けり』における内面的な観念性への深化の、外面的な其れへの拡散」としての「といふ」に近く、伝聞の言語内容が「作者にとって主体的に受けとられるということがなく、かならず对象的にだけ受けとられるもの」としての「といふ」であり、観念性をもったそれであり、直接的表現になるべき質のものではない。つまり、飛鳥時代飛鳥地方で成立したなら直接経験したことであるから、直接的表現「ける」をとるべきで、伝聞の形の間接経験として表現すべきではないというような質の問題ではないのである。よしや現実的に考えても、「人」が水を「間なく」汲み「時じく」飲むという行為の事実、「我」が直接経験的に知りうる事実ではない。人の行為

である限り同時代同地方のことであつても我は伝聞によるしかその事実を経験できるものではないであらう。まして「けり」自体がというような意味での直接性を持つ語でなく、非体験の伝聞した事実を述べる意を持つ語でもあつてみれば、その批判は問題外であらう。⁽¹²⁾

「小治田の年魚道」は大和の飛鳥地方の地名と見るべきであり、またそのことと関わつて、松田氏や曾倉氏のように、CをDの影響の下に成立したと考える必要はない。都倉義孝氏（前掲論文）は、Cの歌が『日本書紀』天武十二年正月十八日の条に「是の日に小墾田舞及び高麗・百濟・新羅、三国の楽を庭の中に奏る」と見える小墾田舞と関係あるのでないかとされる。高麗・百濟・新羅、三国の楽とともに奏された小墾田舞は、おそらく我が国の伝統的歌舞として推古朝から伝誦されて来たものであらう。記紀歌謡の歌謡名には歌詞中の冒頭の語によつて名付けたもの（宮田振・天田振・夷振など）が散見する。Cの歌が小墾田舞の歌詞であつた可能性は高いであらう。

六

以上のように私見では、A・Bは飛鳥地方に成立した相聞歌謡であるCなどを基として、そこに旅行きの表現の型であるXの形

式を取り込み、綿々たる思いに山道を辿る内容の歌に形成していったものと考えるのである。そして、それは諸説の述べるように天智天皇十年十月十九日の大海人皇子の吉野入りの折の心情の表現として形成されたものと思われる。Cから直接にA・Bが形成されたものならば、「隈もおちず……その山道を」の表現は採られなかったはずである。そこにXの形式を取り込んだところに、A・Bの歌の創作性がある。それは山道をゆく設定が必要であったから、つまり、天武の吉野隠遁の時のことを歌うためにわざわざXの形式を取り込んだものといえる。わざわざXの形式を取り込んで吉野隠遁時の心情を表現しようとする作者が、Cの「いふ」という、作者に主体的に受け取られるということのない伝聞の表現をそのままに受け入れるであろうか。作者が天武天皇ときされる限りにおいて(実際に天皇自身の作であるか、第三者の作であるかは別として)、天武の実体験として「真実への深い詠歎を含む現実性判断の卓越した」(注8論文)「ける」への詠み変えが計られたはずである。⁽¹³⁾ そういった点でAは天武自身の歌として形成され、BはAが天武の歌として伝播する中に生まれた異伝と考えられよう。或いは、天武八年五月の行幸時に往時を回想して天武の歌とされるAが人々によって歌われた形がBであり、それが伝承されDの相聞歌謡に転化したものかも知れない。

その詠み変えにおいて、人の間なく汲み、時じく飲むあゆぢの水が、時なく降る雪や、間もなく降る雨として歌われていったことについては、大海人皇子の吉野入りという事態と旧暦十月下旬という時節の実際とがあると思えるが、また、漢籍の影響もあると思われる。

中西進氏は天武御製について述べて、

持統・文武朝以降のしばらく、壬申の乱は最も生々しくも重大な歴史的事件として意識されたであろう。その中でこの吉野入山が大きな物語のさわり、(傍点原文)だった事はいう迄もない。この歌はその中に採用されたものであるが、この際に、この採用の背景として楽府詩の想像があつたらう事が考えられる。「苦寒行」の一つ、魏の武帝の詩には

北のかた太行山に上る。艱い哉何ぞ巍巍たる。羊腸阪詰屈たり。……蹊谷人民少く雪落ちて何ぞ霏霏たる。頸を延べて長く歎息し、遠行して懐ふ所多し。

とあり、天武歌とまことによく類似している。それらの連想が天武吉野歌を固定させる原因の一つであつたらうと想像するのである。(『万葉集の比較文学的研究』「主題論」第一章)

と、魏の武帝の「苦寒行」との連想を指摘され、それがA・Bの吉野歌を天武天皇に結びつける原因の一つであつたと推定する。

私見ではA・Bの形成自体が天武天皇の事件に関わったのことに考えるのであるが、武帝の「苦寒行」との結びつきの御指摘は傾聴すべきであろう。曲がりくねった羊腸坂を、雪の甚だしく降る中怫鬱とした心のまま辿って行く武帝の嘆きは、雪や雨の間断なく降り続く吉野の道の隈を止むことのない思いを抱いて辿って行く天武の心と重なる。

ただ、A・Bの形成者(天武自身であるよりも、おそらく吉井巖氏前掲論文にいうように専門詞人であろう)は、「苦寒行」の連想の下に、その措辞のもとになった『詩経』の詩句を心に置いていたはずである。『文選』李善注では「蹊谷少_ニ人民_一、雪落何霏霏_一」の句に注して「毛詩曰、雨雪霏霏」と記し、『詩経』小雅「采薇」の「今我来思、雨_レ雪霏霏」をその典故として挙げるが、戎役の者を遣わす時に歌う歌とされる「采薇」の詩句を典故としたというより、建安十一年上黨の高幹を伐つために太行越えをした時の作とされる武帝の「苦寒行」の典故としては、『詩経』邶風「北風」の「北風其喑、雨雪其霏」を挙げるのが正しかろう。「北風刺_レ虐也、衛國並爲_ニ威虐_一、百姓不_レ親、莫_レ不_ニ相攜持而去_一焉」と記すように、「北風」は酷暴な政治に悩む者の歌であり、その詩句「惠而好_レ我、攜_レ手同_レ行」の鄭玄注に「性仁愛而、又好_レ我者、與_レ我相攜持、同_レ道而去、疾_ニ時政_一也」と見えるように、我

に愛情と好意を持つ者に対して手を携えて道を同じくして去ろう、と呼び掛ける詩句を持つ。「北風其喑、雨雪其霏、惠而好_レ我、攜_レ手同_レ歸」の「歸」は「歸_ニ有徳_一也」と毛伝にいう。天智のもとを去り、自分に付き従う舍人だけに呼び掛けて吉野に隠遁した大海人の言として聞くことも可能な詩句ではないか。「苦寒行」の「蹊谷少_ニ人民_一、雪落何霏霏」に対応する前連が「樹木何蕭瑟、北風聲正悲」と「北風」の語を含むことによっても、「北風」典故の正当なるが知られる。

「雨雪其霏」の「雨」は動詞としてフルの意に解することもできるが、もとより、名詞として解しうる。その場合「雨雪」は雨と雪ということになる。⁽¹⁴⁾ここは「北風」の対として「雨雪」と名詞に解し、「北風は其^{それ}喑^や、雨雪は其^{それ}霏^ちる」と読んでよかろう。『和刻本経書集成』の毛詩の点は名詞ととっており、六臣注慶安版の文選注には「苦寒行」の詩句の注に「善曰。毛詩曰。雨雪霏霏」と「采薇」の詩句(昔我往矣、楊柳依依、今我来思、雨雪霏霏)の読みもやはり名詞に解する。『和刻本経書集成』の毛詩の「采薇」の点も同様。「時なくぞ雪は降りける 間なくぞ雨はふりける」という情景の描写に漢籍の影、詩経の影を見うるのである。

ところで、巻1・二七番の天武御製歌

淑人乃 良跡吉見而 好常言師 芳野吉見与 良人四来三
 の「淑人」が、詩経(曹風)の「鳴鳩」の「淑人君子」に出典を得たものであることは、夙に小島憲之先生の『上代日本文学と中国文学(中)』(八一六頁)に御指摘あるところである。鄭玄箋注に「淑ハ善ナリ」とあることから「よきひと」と訓み得るわけであるが、この典拠は訓みのレベルに止まらず、一首の製作意図に関わる。

左注によると、この歌が作られたのは天武八年五月の吉野行幸時。よく知られた吉野盟約の行われた時である。『日本書紀』によると、この時壬申の乱の起点になった聖地吉野において、天武天皇は「皇后及び草壁皇子尊・大津皇子・高市皇子・河嶋皇子・忍壁皇子・芝基皇子に詔して」千歳の後に事無からしむる誓いを約させたという。行く末の政治の安泰を計ったのである。詩経「鳴鳩」は、「きじばとから発想して、よき政治家の行為にある一貫性をたたえる歌」(吉川幸次郎注『詩経国風』中国詩人選集I)であり、古注では「鳴鳩刺レ不レ壹也、在位無レ君子、用レ心之不レ壹」と見えるように、曹の共公がそうでないのをそしった歌とす。いわゆる鳴鳩は「鳴鳩之養ニ其子」、朝從レ下上、莫從レ下上、平均如レ一」と毛伝にあり、箋注に「興者、喻ニ人君之徳當レ均ニ一也」というように、均一して子に愛情を施す鳥として、理想

的な君主の譬えである。「鳴鳩在レ桑、其子七兮、淑人君子、其儀一兮」と歌われる、その箋注に「淑善、儀義也、善人君子其執レ義當レ如レ一也」と見えるように「淑人(よきひと)」とは、理想的な君主のことであり、「其儀不レ鳴、正ニ是四国」⁽¹⁵⁾「淑人君子、正ニ是国人」と続くように、淑人君子は四方の国々の長として、国民を是正するのである。つまり、「よきのよしとよく見てよしといひし吉野よく見よよき人よく見」と歌われた「よき人」とは、理想的な政治を行う君主のことであり、天武の歌ながら、その「よき人」は吉野に行幸し、盟約を果たさせた天武のことになる。書紀に見える盟約の時の天武の「朕が男等、おのおの異腹にして生まれたり。然れども今一母同産の如く慈まむ」という言葉は、正に「鳴鳩之養ニ其子」、朝從レ下上、莫從レ下上、平均如レ一」という注を思い起こさせる。

二七番の歌は吉野盟約と関わって、六人の皇子(鳴鳩の子は七羽であったが)に理想の政治を誓わせた重要な歌であったのである。その二七番に先立つ二五(A)・二六番(B)が、同じく詩経の詩句を典拠としていたわけである。その歌作りは同一方法になるものである。

単なる相聞歌謡の歌い変えの歌でなく、壬申の乱の実体験の回想の歌として二つの歌の型を採り入れた創作をなしつつ、その典

拠に武帝の「苦寒行」の典故となった詩経の詩句を踏まえた歌作りは、初期の万葉にあつてかなり高度なものといえる。前述のように専門詞人の介在を推定する所以である。おそらく、Aは吉野に隠遁した時の天武の心情を歌った歌として、Cをもとにしつつ旅行きの歌のXをも採り入れて天武の即位後天武の歌として専門詞人によって創作された。それが、天武の偉業を讃える形で天武の歌として人々に歌い広められたのがBであつた。その人口に流行したBが相聞歌謡として後の時代に転化して出来たのがDであつたと考えられる。そして、Bは天武八年五月の吉野行幸時にも、天武を讃える形で臣下の者達によって謡われたに違いない。⁽¹⁶⁾

注

- (1) 18・四二二〇の「賀都良賀気かぐはし君」は「賀都良賀気」を「かぐはし」に掛かる枕詞とする説と、鬘をかけて美しい君、と解する説とあり、解釈が分かれている。私には前者が正しいと思われるが、いずれ解釈の分かれているものは用例とし難い。
- (2) 「高松」は井上新考に「当時タカマトをタカマツとも（ミモロ、マキモクをミムロ、マキムクともいひし如く）いひし故に高松と書けるにこそ」とあり、諸注それに従う。全集本には、現在の高円山の土質は松茸の生育に適しないという小清水卓二

氏の報告をあげて、なお疑問を残されているが、いずれ作歌時期としては奈良遷都後と考えてよいものと考ええる。

- (3) 卷十三の例も、三三〇四の長歌の三三〇三は「告ぐらく……告げつる」という漢文訓読の語法であるところの引用型式（小林芳規氏『平安鎌倉時代に於ける 漢籍訓読の国語史的研究』一三九七頁〜一四〇〇頁の御指摘）を持つことから遠藤宏氏『古代和歌の基層』一〇六頁）は後期万葉に近づけるべきと述べられ、また三三三三のような、旅に出た人の行路の無事を祈つて家人が斎をおこなうことを歌に歌う例は、阿蘇瑞枝氏『万葉集羈旅歌の世界』『論集上代文学』第八冊、のち『古代和歌史論考』所収）の御指摘によると、そのほとんどが万葉第四期に属するとされる。タダカの歌語表現自体が時代として新しい可能性を持つと言えよう。

- (4) 『説文解字』に「直、正見也」と見え、『廣雅』釋詁一、及び『廣韻』に、「直、正也」と見えるように、「直」と「正」とは通じ、万葉集中でも通じて用いられており、「直香」も「正香」も同じく正訓意識で書かれた表記と考えてよい。「タダ——」の例は、タダカの他に、 \wedge ——ゴエ、——ヂ、——テ、——ノリ、——ムカフ、——ミ、——メ、(1) ——ワタリ \surd があるが、この中仮名書きの卷の用例である、多太末(15・三六八八)、多太手(14・三四三九)、多太向(19・四一六九)、多太牟可布

(19・四一六九)の例を除くと、

直超(6・九七七)

直道(11・二六一八)

直乘(11・二七四九)

直向(4・五〇九、6・九四六)

直目(9・一七九二、一八〇三、12・二九七九)

正目(13・三二五〇)

直渡(10・二〇八五、13・三三三五、三三三五、19・四二四五)

直涉(13・三三三九)

と、「直」と「正」に下接する字が正訓字である。

卷十三における「カ」の仮名の表記は、「加」「鹿」「蚊」それぞれ一例、「香」十例、「可」二十四例であり、「可」の字が一般的といえる。十例に及ぶ「香」の字は必ずしも少ない表記とはいえず、単なる一般的表記としてたまたま「香」を用いたと考えられないこともないが、内訳を見るに、「正香」二例(三二九三、三三〇四)を除いた八例の使用例は、「明日香」(三三二七、三二六六、三二六七)、「伊香胡山」(三二四〇)の地名の四例は固定性を持った表記例であり(アスカの地名表記には「明日香」を用いるのが歌の上では常であり二十九例、「飛鳥」は六例。イカゴは13・三二四〇の他に8・一五三三の例と一五三二の歌の題詞の用例を見るが、いずれも「伊香」と「香」の字を用いて

いる。好字意識によるものであるとかがえられ、正字的といえる)、助詞二例のうちの「間細美香母」(三二三四)はマグハシの意味を表記的に匂わすために「美」に合わせて「香」の表記を選んだものと考えられ、「香黒髪丹」(三二九五)の例とともに、表意を意識した表記であり、「妻香有異六」(三三三六)は、その前にある「真名子尔可有六」と対句をなすところから変字を用いたものとも考えられ、あるいは「妻」の語の後に続くところから「香」の字を選択したものとも見うる。残る「奥香」(三三二四)一例にもあるいは何らかの表記意識が存したやもしれぬ。具体的に見れば「香」の仮名表記は一般的とはいえず、「正香」の正訓意識は強いといえよう。

(5) 『玉台新詠』には以下の例を見る。

刈_レ蘭争_ニ芬芳_一 採_レ菊競_ニ蔵_ニ 開_レ奩集_ニ香蘇_一 採_レ袖解_ニ纓_ニ徽_一
(卷四、鮑照「雜詩九首」其五「夢還詩」)は妻の姿を蘭の香に譬えた例。

蛾眉已共笑 清香復入襟(卷四、謝朓「雜詩」其三の二「上客光四座」)は上客の美女との交情をいつた条。

故交不可忘 猶如蘭桂芳 新知雖可悦 不異茱萸香
(卷六、何思澄「懷古」)は「蘭桂芳」に故婦、「茱萸香」に新婦を譬える。

茱萸自有芳 不若桂與蘭(卷二、曹植「浮萍篇」)も同様。

影逐_ニ斜月_一来 香随_ニ遠風_一入 (卷十、沈約「詩三首」其三「為隣人有_レ懷不_レ至」) では「香」は恋しい女の象徴。

ただ単に異性の魅力をいうのにその香を詠む詩は、

稍聞玉釧遠 猶隣翠被香 (卷五、何遜「嘲_ニ劉諮議孝綽_一」)

衣香知_ニ步近_一 釧動覺_ニ行遲_一 (卷七、湘東王繹「登_ニ顔園故閣_一」)

閣_一)

翠釵挂已落 羅衣拂更香 (卷八、劉孝綽「雜詩五首」其二「淇上人戲_ニ蕩子婦_一示_ニ行事_一」一首)

去燭猶文_レ水 餘香尚滿_レ舟 (卷十、皇太子簡文「雜題二十一首」

其十「夜遣_ニ内人還_ニ後舟_一」)

など例が多い。女性の閨房の香をいう例も、

錦衾無_ニ獨暖_一 羅衣空自香 (卷五、沈約「古意」)

不_レ見可憐影_一 空餘黼帳香 (卷六、徐悝「贈_ニ内_一」)

など見える。

(6) 間断なき事象を譬喩の序として心情の「止む時もなし」に結ぶ例は

千鳥鳴く佐保の河瀬のさざれ浪止む時もなし吾が恋ふらく

は (4・五二六)

吾も思ふ人もな忘れおほなわに浦吹く風の止む時なけれ

(4・六〇六)

千鳥鳴くみ吉野川の川音の止む時なしに思ほゆる君

(6・九一五)

白妙の袖触れにしよ吾背子に吾が恋ふらくは止む時もなし

(11・二六一二)

大海に立つらむ波は間あらむ君に恋ふらく止む時もなし

(11・二七四一)

留まりにし人を思ふに秋津野にゐる白雲の止む時もなし

(12・三一七九)

阿胡の海の荒磯の上のさざれ波我が恋ふらくは止む時もなし

(13・三二四四)

と一つの型をなしており、一方「間なし」で受ける例も、4・

七六〇、12・三〇八八、13・三一六八の他、

阿倍の島鶉の住む磯に寄する波間なくこのころ大和し思ほ

ゆ (3・三五九)

庭清み沖辺漕ぎ出づる海人舟の梶取る間なき恋もするかも

(11・二七四六)

との曇り雨降る川のさざれ波間なくも君は思ほゆるかも

(12・三〇一二)

ま菅よし宗我の川原に鳴く千鳥間なし我が背子我が恋ふらくは

くは (12・三〇八七)

松浦舟騒く堀江の水脈速み梶取る間なく思ほゆるかも

(12・三一七三)

神さぶる荒津の崎に寄する波間なくや妹に恋ひ渡りなむ

(15・三六六〇)

白波の寄する磯廻を漕ぐ舟の梶取る間なく思ほえし君

(17・三九六一)

香島より熊木をさして漕ぐ舟の梶取る間なく都し思ほゆ

(17・四〇二七)

波立てば奈呉の浦廻に寄る貝の間なき恋にそ年は経にける

(18・四〇三三)

防人の堀江漕ぎ出る伊豆手舟梶取る間なく恋は繁けむ

(20・四三三六)

堀江より水脈浜る梶の音の間なくそ奈良は恋しかりける

(20・四四六一)

と類型をなしており、こういった点を考えても、「間もおちず」の句の介在は表現として熟さないこと明らかである。

(7) DがBやCより後の成立であることは、トキジの語の表記の面からも推定される。「時無曾ときなくぞ—時無如ときなきがごと」のAは別として、「トキジクゾ—トキジキガゴト」の表記は、それぞれB「時自久曾—不時如」、C「時自久曾—不時之如」、D「不時曾—不時如」となっている。つまり、B・Cは「自久曾」と仮名表記になつてるところから、後句の「不時」をトキジと訓み得るのであり、「自久曾」の仮名表記は誤読を避けるための表記上の配

慮であると考えられる。それをDにおいては前後句いずれも「不時」と表記してあるのは、B・Cなどの歌を前提として表記されているからでないか。トキジの語の集中の表記例は、

トキジキ 時敷(3・三八二) 不時(1・二六、13三二

六〇、三二九三)

トキジキフヂ 非時藤(8・一六二七)

トキジク 等伎自久(18・四一一) 時自久(1・二六、

3・三一七、13・三二六〇) 時士久(18・四一一)

不時(13・三二六〇)

トキジケ 等枳自家(18・四一三七) 時自異(4・四九

一、10・一九三一)

*題詞の例(8・一六二七の題詞)は除外する。

*時士久(18・四一一)は工藤力男説による(古写本原文は「時支」)。代匠精撰本には「支」の字の下に「久」の字

脱かとし、万葉考は「支」を「及」の、略解は「支」を「敷」の誤りかとし、それぞれトキジクと訓む。

*7・一二六〇の「不時斑衣」はトキナラヌと訓む古写本旧訓に従う。

となっており、トキジの語を「不時」で表記するのはB・C・Dのみである。「不時」をトキナラヌと訓む例(10・一九七五)や、トキナラヌと訓む例(7・一二六〇)もあることを考えれ

ば、トキジと訓むことは案外難しかったのかも知れない。一六二七「非時藤」がトキジキフジと訓まれるようになったのも、万葉考に至ってからで、古写本ではトキナラヌフジと訓まれていたことなども考え合わせてよい。B・Cの前句が「時自久」と仮名表記であるのは、「不時」をトキジと訓ませるための配慮であつたと思われる。それ前後句とも「不時」となっているDは、「不時」をトキジとも抵抗なく訓めるようになってからの成立と考えられ、表記的にB・Cを前提としているといわねばなるまい。

なお、D「間無序」の「序」の助詞表記は集中他に七例しか見えない珍しい用字で（助詞でない用例は家持の「許序能秋」18・四一・一七の一例のみ）、その内、人麻呂歌集の例が三例（10・二〇一九、11・二四四〇、二五一〇）、卷十三の例が三例（13・三三〇五、三三〇六、三二五七）、作者不明の例一例（12・三二一九）であり、三三〇五、三三〇六が三三〇九の人麻呂歌集の歌の類歌であることを考えると、「序」の用字は人麻呂周辺の用字といえようか。

(8) 森重敏先生は「『けり』の意味分化」（『万葉』第七十号）において、いわゆる伝聞の助動詞「とふ」と、「けり」との意味の構造連関について

それはけだし、「けり」における内面的な観念性への深化の、

外面的な其れへの拡散である。「とふ」といわれる伝聞の言語内容は、……中略……作者には主体的に受けとられるということがなく、かならず対象的にだけ受けとられるものである。伝承は作者がみずから伝承荷担者の立場に立つ限り、絶対的な三人称性をもって迫るものであるが、伝承は作者にとつてただ相対的な三人称性に立つにとどまる。そのような伝聞内容も勿論観念的であるが、その観念性は消極的であり、内面的に絶対化された観念のもつ論理性にも情意性にも普遍性をもつことができない。

と述べておられる。また、二五番の「ける」については作者を所伝の通り天皇であるとすれば、み吉野の現実との対応が考慮に入るだけそれだけ、観念性判断に支えられての、したがって真実への深い詠歎を含む現実性判断の意味が卓越したものと理解することもできるが、同時に、ほかならぬその観念性判断において、そこから「隈もおちず思ひつつぞ来るその山道を」という本詞への序詞となりうる底の、比喩の論理性を含む限りでの観念性判断の意味の存することをも理解しなければならぬ。

と指摘されている。小論は御論考のような深い「けり」と「いふ」の意味理解の上にたつての考察ではないが、その指摘は参考になる。

(9) 三三一〇番は古事記歌謡の八千矛神の沼河比売への求婚の神語歌

八千矛の神の命は 八島国妻枕きかねて 遠々し高志の国
に 賢し女を在りと聞かして 妙し女を在りと聞こして
さ婚ひに在り立たし 婚ひに在り通はせ 太刀が緒も未だ
解かずて 襲をも未だ解かねば をとめの寝すや板戸を
押そぶらひ我が立たせれば 引こづらひ我が立たせれば
青山に鶴は鳴きぬ さ野つ鳥雉は響む 庭つ鳥鶏は鳴く
うれたくも鳴くなる鳥か この鳥も打ち止めこせね いし
たふや海人駈使 事の語り言もこをば (記2)
の類歌となっている。記2の類歌は他にも

八島国妻枕きかねて 春日の春日の国に 妙し女を在りと
聞きて 宜し女を在りと聞きて 真木栄く檜の板戸を 押
し開き我入り坐し……穴串ろ味眠寝しとに 庭つ鳥鶏は
鳴く 野つ鳥雉は響む 愛しけくも未だ言はずて 明けに
けり我妹 (記96)

東屋の真屋のあまりの その雨そそぎ我立ち濡れぬ 殿戸
開かせ
銚も銚もあらばこそ その殿戸我鎖さめ 押し開いて来ま
せ 我や人妻 (催馬楽6 東屋)

他国に婚ひに行きて太刀が緒も未だ解かねばさ夜ぞ明けに

ける(12・二九〇六)

と類歌関係なし、土橋寛先生(『古代歌謡全注釈 古事記編』)は、これらによって「ある型を持った妻問いの歌の流布が推測される」(32頁)と述べておられる。なお、関連して妹の家の戸口で通い路の辛苦を訴える型があり、それについては拙稿「通いの歌の一樣相」(『同志社国文学』第八号)を参照されたい。

(10) 奥野氏は前掲論文において、卷十三の全歌中、地名を持つ歌は約四十二であり、「その内大和の地名を詠み入れたのが約二十五、就中相聞歌では約十四の内大和以外は難波、伊勢各一、紀伊二のみで、大和、それも『巨勢道』、『小治田』、『泊瀬の河』、『神名火山』、『明日香の河』、『三諸の神奈備山』、『真神の原』、『山田の道』、『剣の池』、『清隅の池』、『み芳野』、『御金の獄』、『吉野の岳』、『三宅の原』など殆ど飛鳥を中心にした地名を詠み込んでゐる」と指摘する。なお阿蘇瑞枝氏「万葉集卷十三の編纂私論」(『論集上代文学』第二冊)に地名の表を掲げてさらに詳しい。

(11) 曾倉岑氏「天武御製歌と周辺の歌」(『国語と国文学』昭和57年11月号)も、松田説の批判を正しいとして、Cを最初の歌とする沢瀉説を批判する。ただし、曾倉氏は松田氏のように尾張説を採るのでなく、大和説に従い、CはDの影響のもとになったものと考えておられる。

(12) Aの歌(1・二五)では、「み吉野の耳我の嶺に 時なくぞ雪は降りける 間なくぞ雨は降りける」の上句を承けて「隈もおちず思ひつつぞ来し その山道を」と結ばれている故に、「けり」が過去の体験的事実を現在の立場において解釈して述べる意になるわけであり、Cの歌(13・三二六〇)のように上句が単に「止む時もなし」という句を導く序として機能するだけの歌において、「ける」に置き換えたとしても、その内容は体験的事実を歌ったものと積極的には理解しがたく、むしろ、非体験の伝聞した事実として理解する方向に傾かざるを得ないであろう。

「といふ」には、森重敏先生(『万葉集』における『らむ』と『といふ』との交渉)『万葉』第五十八号)御指摘のごとく、

よそにゐて恋ひつつあらずは君が家の池に住むといふ鴨に
あらしを (四・七二六)

のように「最初から想像を加える余地のほとんどない伝聞内容を導く場合さえあり」、「伝聞的な間接体験ながら、直接体験しなくても伝聞内容が現実と指示的一致にあることが、当然にも容易にも考えられる事象であり、ないしは、指示的一致など考える必要さえないがゆえに積極的な想像をする必要もないような伝聞内容である」例もあり、そういった「自明な客観性をもつ内容の伝聞受容の場合を介して、一般的―恒常的な観念に

移行しうる」という。Cの歌における「といふ」の観念性の獲得もこういった延長線上にあるといえよう。「伊香保風吹く日吹かぬ日ありといへど我が恋のみし時なかりけり」(14・三四二二)は「といふ」の内容が伝承性のものであるが、Cはなお伝聞性に止まるものといえようか。

(13) おそらく、「といふ」から「ける」への詠み変えの時に、「時じ」から「時なし」への詠み変えもなされたものであろう。「時じ」は「①時がさだまっていけない。②季節はずれである。」(『岩波古語辞典』)意である。「時じくぞ人は飲むといふ」とは、水ヲ飲むベキソノ時ヲ定メルコトナク人ハ水ヲ飲むということであろう。古代のように毎朝容器に水を汲み置かねばならない社会においては、水は無闇に飲まれるものではなく、通常、朝・昼・夕の然るべき折、労働の休息時などに、ある程度のきまりをもって水は飲まれたはずである。ところが、小治田のあゆぢの水は名水だから、然るべき時ということなく人々が集まり水を飲むという、そのように、我が妹に恋うるのは、何時とということなく止む時なく恋うというのであろう。しかし、Aにおいては、耳我の嶺に降る雪であり、旧暦十月の下句のことであるから、その時となく降る雪の意に理解されるのでは具合が悪いのである。「といふ」に戻ったBにおいては、その伝聞性において、時となく雪降る耳我の山でさしつかえなかったと思わ

れる。

渡瀬昌忠氏は「謡とその流れ―対句の対応における流下型と波紋型―」（上代文学会編『万葉と歌謡』・万葉夏期大学16）において「『来』の字が「来る」から「来し」へと訓を変え、それとともに『時じく』という『ソノ時節デハナイノニ』『時節ハズレニ』とも解しうる語が『時ヲ定メズ』『ヤム時モナク』の意の『時無く』に改められる。こうして、C（本稿のB）のような典型的・伝誦的な表現が、D（本稿のA）の、個性的な、一回限りの歴史的体験としての天武天皇の思いを歌う歌となる。集団の謡から個の歌へ、叙情詩へ、万葉の文学的な和歌へ、という過程が、「ここにたどられるのである」と述べておられる。同感である。

(14) 吉川幸次郎注『詩経国風』（中国詩人選集）には「雪を降らし^{ゆき}て其れ霏^ちる」と読んでいるが、名詞としての解もありうることを述べる。

(15) 吉野宮は応神天皇十九年冬十月「吉野宮に幸す」とあるのが初見であり、雄略天皇は二年冬十月、四年八月と兩度吉野宮に行幸し、ことに四年八月には天皇の臂を刺した蛇を嚙った吉野の蜻蛉を讃めて歌を歌い、その地に蜻蛉野と名付けている。「よき人」は或いは先帝である雄略などを指すかとも考えられるが、いずれ、天武のことをも指していると見てよい。全注は天武天皇と皇后を暗示するとする。

(16) 諸氏にならって私見を図に示すとすれば次のごとくになる。

$$C \downarrow A \downarrow B \downarrow C \downarrow D$$

$$X \swarrow$$

付記 本稿は第四十四回（平成三年度）万葉学会全国大会研究発表会（於光華女子大学）での発表をその骨子とするものである。席上、神野志隆光氏より貴重な御意見を賜った。記して謝意を表したい。

（さかもと のぶゆき・奈良女子大学助教授）

池主の「敬和歌」をめぐって

——天平十九年家持・池主の長歌贈答——

大越喜文

はじめに

越中時代は家持にとってまさしく長歌の時代であった。全歌作の約七割強をこの時期に制作している。その最初の多作期は天平十九年の春から夏にかけて訪れる。二月二十日の家持長歌、「忽ちに枉疾に沈み：悲緒を申ぶる一首」(巻十七・三九六二〜六四)を皮切りに、この期には八首を制作している。そしてこの多作期に大きく関わるのが歌友池主である。ふたりのやりとりは、家持の赴任した天平十八年より始まるが、池主の帰任、家持の病とあり、本格的に始動するのは、この天平十九年を待たねばならなかった。二月二十九日に端を発し、ふたりのやりとりは五月二日まで続く。そしてこの中で、都合四回の長歌贈答が行われているのである。従来この贈答、どうしても家持側にたつて眺められることが多かった。しかし、贈答歌である以上、「受ける側」の池主歌からの検討も必要であろう。贈る側に比べて、答える側の方がより細

やかな対応を迫られるし、相手が上司家持ならばなおさらのことである。この点、とりわけ長歌なら池主の配慮の跡が考察しやすい。そしてこのことを確かめることは同時に、贈る側の家持歌の理解を深めることにもなるであろう。まず、その手始めとして、小稿では池主の長歌「：敬和歌、其詞云、」(巻十七・三九七三〜七五)を中心に取り上げてみたい。この長歌は、直接は三月三日に家持からおくられて来た「更贈歌一首」(同・三九六九〜七二)に応じたものであった。

ところで、この二首の対応について、最近、橋本達雄氏に精緻な御研究がある(『萬葉集全注巻第十七』——以下『全注』と示す)。また「山柿」拾穂の論「『大伴家持作品論攷』でも詳しく述べられる)。氏は二首の対応を徹底的におさえられた上で、「……一首は、家持の三九六九の内容にいちいち対応させて答え、家持の悲観的な心境を慰め、励まし、引き立てようとする深い配慮から作られたものである。」といわれ、まさに間然する所がない。

しかしまた素朴な印象として、家持長歌が一筋の流れを持って
いるのに対し、この池主の長歌は切れぎれの感がある。時として
池主長歌は家持長歌と微妙に食い違い、家持長歌には見当たらな
い、何か孤立的な一文・語句も目に付くのである。屋上屋を架す
ることを恐れつつ、今一度、検討を試みたく思う次第である。

一 敬和歌と更贈歌

まず対応する家持、池主の長歌を順に掲げる—以下更贈歌、敬
和歌と呼ぶ—。

更に贈る歌

④大君の 任けのまにまに しなざかる 越を治めに 出で
て来し ますら我すら ①世の中の 常しなれば うちな
びき 床に臥い伏し 痛けくの 日に異に増せば 悲しけく
ここに思ひ出 いらなけく そこに思ひ出 嘆くそら 安け
なくに 思ふそら 苦しきものを ③あしひきの 山きへな
りて 玉梓の 道の遠けば 間使ひも 遣るよしもなみ 思
ほしき 言も通はず たまきはる 命惜しけど せむすべの
たどきを知らに 隠り居て 思ひ嘆かひ 慰むる 心はなし
に 春花の 咲ける盛りに 思ふどち 手折りかざさず 春
の野の 繁み飛び潜く うぐひすの 声だに聞かず 娘子ら

が 春菜摘ますと ②紅の 赤裳の裾の 春雨に にはひひ
づちて 通ふらむ 時の盛りを いたづらに 過ぐし遣りつ
れ 憊はせる 君が心を 愛しみ この夜すがらに 眠も寝
ずに 今日もしめらに 恋ひつつそ居る (三九六九)
……敬みて和ふる歌、その詞に云はく、

④大君の 命恐み あしひきの 山野障らず 天離る 鄙も
治むる ますらをや なにか物思ふ ③あをによし 奈良道
来通ふ 玉梓の 使ひ絶えめや 隠り恋ひ 息づき渡り 下
思に 嘆かふ我が背 古ゆ 言ひ継ぎ来らし ①世の中は
数なきものそ 慰むる こともあらむと 里人の 我に告ぐ
らく 山辺には 桜花散り かほ鳥の 間なくしば鳴く 春
の野に すみれを摘むと ②白たへの 袖折り返し 紅の
赤裳裾引き 娘子らは 思ひ乱れて 君待つと うら恋すな
り 心ぐし いざ見に行かな ことはたなゆひ (三九七三)
家持の更贈歌は大きく前・後半に分けられよう。前半では、自
身を襲う不幸を淡々と描き如何ともし難いこと。後半ではそれ故
に、娘子の裳裾にほふ春なのに空しく時を過ぎざるを得ないこ
とが述べられ、最後は恋歌風に池主へ呼び掛ける。しかしその境
は、「…慰むる心はなしに春花の…」とやや曖昧で、殆ど切れ目
なく最後まで続いてゆく。⁽¹⁾ 答える池主の敬和歌は、冒頭の「ます

ら我すら世の中の常しなれば」に対して「ますらをやなにか物思ふ」、「玉梓の道の遠けば間使ひも遣るよしもなみ」には「玉梓の使ひ絶えめや」、以下同様に、「慰むる心はなしに」——「慰むることあらむと」「春花」——「桜花」「うぐひすの声だに聞かず」——「かほ鳥の間なくしば鳴く」「春菜」——「すみれ」と逐一具体的に、橋本達雄氏の前掲論文に詳しい。いきおい、家持の長歌に比べ、池主の敬和歌が断片的な印象になるのも当然のことではあった。⁽²⁾ 加えて、神堀忍氏が「特に、長歌ではその力量に相当の差があった。」（「家持と池主」『万葉集を学ぶ 第八集』）ということなら、なおさらであろう。しかしまた別に、この印象について、『全註釋』に「短い文章が重なつてゐるが、あちこちに互つて述べてゐる傾きがある。」と指摘された点も見過ごすわけにはいかなのである。

例えば敬和歌の中頃に「世の中は数なきものそ」とある。『窪田評釋』に言う如く、更贈歌の「世の中の常しなれば」に答えたものであろう——傍線①の対応——。しかしならば、『世の中は常なきものそ』が自然ではあるまいか。実は、「世の中は数なきものそ」はこの前、二月二十日の家持長歌「忽ちに枉疾に沈み：悲緒を申ぶる一首」（三九六二）の短歌に、そのまま「世の中は数なきものか」とあつたところである。——以下悲緒一首と呼ぶ——。

池主の「敬和歌」をめぐって

世の中は 数なきものか 春花の 散りのまがひに 死ぬべき思へば
(三九六二)

このころ、とりわけ模倣の跡顯著だった山上憶良の「倭文たまき数にもあらぬ身にはあれど……」（巻五・九〇三）あたりを模倣したのであろうが、⁽³⁾ 「世の中は数なきもの」と断じた成句はこの家持の例以外には見当たらず、池主の表現がこの例を直接引くものであることはまず間違いないところである。⁽⁴⁾

また、敬和歌の後半部には「白たへの袖折り返し紅の赤裳裾引き」とあり、家持の「紅の赤裳の裾の春雨ににほひひづちて」にあたるが、家持のには「白たへの袖折り返し」がない——傍線②の対応——。尤もここは、家持が春雨に濡れ紅の色鮮やかな娘子を描写するのに対し、池主は晴天の春の野に董を摘む娘子を描き対照的に詠じているとも思われる。それにしても、やはり悲緒一首では都の妻を想像して、

……妻の命も 明け来れば 門に寄り立ち 衣手を 折り返しつ……
(三九六二)

とあつたところである。無論、この場合は夫を待つ妻の呪的動作であり、敬和歌の場合の「袖口が汚れないようにまくって折り返す」（『古典全集』）のとは意味も違う。しかし、池主がこのあたりの表現を目にしていたことが、更贈歌にはない「袖折り返し」

をここで用いるきつかけになつてはいないだろうか。(この点後述)

一体に、この家持の二つの長歌、悲緒一首と更贈歌は極めて似通うものがあつた。吉井巖氏はこういつた点、この二つの関係を具体的に「試作」から「流用」という過程で説かれた(「越中守家持の作品をめぐって」『萬葉』第十五号)。ならば、池主の敬和歌が更贈歌に答えることはそのまま悲緒一首にも応ずることにもなつたとも、いえばいえそうである。しかし、悲緒一首―三九六三にしかみえない「世の中は数なきもの」を引くあたり、偶然な対応とは到底思い難い。金井清一氏がこの悲緒一首が家持にとつて「最初の独詠的性格の長歌である」ことを指摘され(「大伴家持の長歌―花鳥諷詠長歌の機能とその成立契機―」『萬葉詩史の論』)、また『全注』でも「とくに誰かに示そうという目的もなく、心やりに作った作」といわれるのは、制作された時点では諾われるものの、池主がこの長歌を何らかの機会に目にしていたことの可能性も否定できなからうと思われる。

池主はまた、「あをによし奈良道來通ふ玉梓の使ひ絶えめや」と、ここでは僅か四句で家持の「あしひきの山きへなりて：思ほしき言も通はず」に答え慰めている―傍線③の対応―。確かに、『全注』のいわれる如く内容上は対応するが、「あをによし奈良」

「玉梓の使ひ」という詞句そのものはみえない。そして、これを用いた長歌がこのころの家持にもある。前年の天平十八年、越中での最初の長歌「哀傷長逝之弟歌」(巻十七・三九五七―五九)である。この長歌には

……あをによし 奈良山過ぎて……玉梓の 使ひの来れば
嬉しみと…… (三九五七)

とある―以下弟歌と呼ぶ―。敬和歌中の詞句も、或いは、この弟歌中の表現をそれとなく意識してはいないだろうか。「玉梓の使ひ」はそう特殊な語句でもないが、家持、池主は後にも先にも、この弟歌、敬和歌でしか用いてはいないのである。

もう一つ、敬和歌の中頃に「里人の我に告ぐらく」という表現がある。触れた如く、更贈歌の「慰むる心はなしに」に対して「慰むることもあらむと」と応じたわけで、その流れに添う表現ではあろうが、「我に告ぐらく」という設定そのものは池主歌においてのみで目を引かれる。しかしこれも、弟歌なら末尾に挽歌表現として

……佐保の内の 里を行き過ぎ……白雲に 立ちたなびくと
我に告げつる (同)

とある。敬和歌の「あをによし奈良道來通ふ玉梓の使ひ絶えめや」：慰むることもあらむと里人の我に告ぐらく」あたりの口ぶりは、

やはり、この弟歌を念頭においてのものではなかったろうか。この敬和歌の「あをによし：使ひ絶えめや」の部分に注し、『全註釋』に「しかしこの一段は、他との連絡無く、挿入的である」とあるのは、『全注』のいわれる如く、「家持の歌との応対を考慮に入れていないところからの誤解である」のかも知れないが、内容は更贈歌にあわせつつ、しかも弟歌の表現を取り込み答えようとしたが故の印象でもなかったか。

敬和歌の冒頭で池主は「大君の命恐み」と応じた後、「あしひきの山野障らず天離る鄙も治むるますらをやなにか物思ふ」と続けている――傍線④の対応――。一見、そのまま更贈歌にに応じているかにもみえるが、目を凝らせば、更贈歌では家持は自身の造語「しなざる」を用いているのである。悲緒一首では「天離る鄙に」であつて「治むる」はない。この点、弟歌だと冒頭に「天離る鄙治めにと」とある。一体に、「天離る」は相当数みられるものの、「天離る鄙治めに」という成句となると極めて限られる。⁽⁵⁾

天離る 鄙治めにと 大君の 任けのまにまに 出でて来し
……玉梓の 道をた遠み 山川の 隔りてあれば……

(三九五七)

大君の 任けのまにまに ますらをの 心振り起こし あし
ひきの 山坂越えて 天離る 鄙に下り来…… (三九六二)

尤も、「ますら(を)」があるのは悲緒一首、更贈歌で弟歌にはみえない。敬和歌の「あしひきの山野障らず」あたりの言い回しは、悲緒一首の「あしひきの山坂越えて天離る鄙に下り来」に近い気がするが、更贈歌には「あしひきの山きへなりて」、弟歌にも「あしひきの」はないものの「山川の隔りてあれば」とあり、いづれに応じたとも決め難い。むしろこの敬和歌の冒頭表現などは、弟歌、悲緒一首、更贈歌を一通り視野におさめてのものとするのが最も自然な感もする。とまれ敬和歌の「天離る鄙も治むる」が、その口調とあわせて、直接には弟歌の「天離る鄙治めにと」に呼応するものであることは間違いない。

池主の敬和歌が更贈歌に答ふるに、悲緒一首をみていたことは勿論、同時に弟歌をもみていた節がある。

ところで、更贈歌が悲緒一首を下地にすることについては吉井氏の御論(前掲)の通りであるが、改めて見直すと、更贈歌中にも書持の死を漂わせていると感じられる部分がある。

悲緒一首では綿々と綴られる肉親への思いが、更贈歌では抑えられた調子であった。例えば、『古典集成』にも「冒頭十二句と『玉梓の』以下十四句で三九六二を踏まえながら、家郷への思いをばかし……」とある。そして注目したいのは、その三九六二を「踏まえていない部分」である。

……悲しけくここに思ひ出 いらなけくそこに思ひ出
 嘆くそら 安けなくに 思ふそら 苦しきものを……

(三九六九)

諸家・諸注に、前四句は古事記中巻の歌謡に、後四句は巻四・五三四(安貴王)、巻八・一五二〇(山上憶良)、巻十三長歌(三二七二、三二九九、三三三〇)等にみられるものであることの指摘はある。しかし、具体的に何を指すかという曖昧である。後四句については、最近、鉄野昌弘氏が先行歌の用例を踏まえつついわれた如く、やはり都の妹を思つてのことであろう。⁽⁶⁾

しかし、前四句の場合はそれとは少しく異なる。後四句との間に一旦休止を置くと、「悲しいことをかれこれ思い出し、つらいことをいろいろ思い出し」(『古典全集』)というわけで、或いは、自身の死を覚悟してのことともとれるが、むしろ前年の愛弟書持の死を指すものとすべきではなからうか。冒頭表現に「しなざかる越を治めに出でて来し」とあり、「越を治めに」と言い、「：来し」と「経験回想」で振り返る調子であるのも、弟歌の「天離る鄙治めにと：出でて来し」に近く、悲緒一首が「天離る鄙に下り来」と臨場感を持った言い方であるのとは対照的でもあった。自身の病、妹への思い、そして書持の死を圧縮して、すなわち悲緒一首を踏まえつつ、同時に弟歌をも含ませ、更贈歌の前半部は

構成されているように思えるのである。

この更贈歌には、何より、池主と歌を交わし合うことができるようになった安堵感が流れているが、その安堵感とは、越中赴任の間もなく家持を襲った二つの不幸——自身の病と書持の死——を静かに振り返る調子でもあったのである。そして、書持の死を漂わすことは同時に、ことさら池主を意識してのものでもあった。書持の死に池主は実際に関わるからである。書持が世を去ったその折しも、池主は大帳使として京に在った。越中への至急の使いは池主等によつて手配され、更に細々とした書持の死に伴う消息は、帰任した池主自身の口頭によつて語られた筈である。⁽⁷⁾ 思えば、天平十年の橘奈良麻呂の集宴(巻八・一五八一〜九二)に家持・書持・池主の三人は揃つて同席もしていた。共に交わすべき書持の思い出は様々にあつただらう。

但し、あくまで前半部の描写は抑えた筆致ではあつた。中心主題は、後半の春景の中で春雨に濡れる娘子をやや官能的に描き、妹を残して来たいかにも男同士の話題を提示し、そして長歌末尾・短歌三首に明らかかなように、池主に呼び掛ける恋歌風の調子にあつたからである。弟の死、自身の病を振り返りつつも、それらを乗り越え、歌を交わし合うことのできる喜びの方が優っているのである。家持長歌を一通り視野におさめていた池主は、こう

いった更贈歌に込められた様々なニュアンスを見落とさなかつた。池主もまた家持の趣旨に添い、前半部では、「ますらをやなにか物思ふ」と更贈歌に応じつつ「天離る鄙も治むる」と弟歌中の表現にも即し、そして「あをによし…玉梓の使ひ絶えめや」と弟歌から、「世の中は数なきものそ」と悲緒一首中から詞句を引用する形でさりげなく答えたのである。敬和歌が断片的な印象になるのは、むしろこの故においてであった。

二 卷十三と憶良

ところで、この悲緒一首、更贈歌に山上憶良歌の影響が極めて大きいことは諸先学のこぞって指摘されるところである。とりわけ前掲の吉井論文には、この点極めて精緻な御指摘があった。そして更に、卷十三との類似が多いことについて述べられたのは神堀忍氏である（「家持における長歌―越中守時代を中心に―」『萬葉学論叢』⁽⁸⁾）。確かに両氏御指摘の通りで、憶良と卷十三の影がすっぽりこの二つの長歌を覆っているといっても過言ではない。

そしてこの傾向は、これほど顕著ではないが、既に前年の弟歌にも確認できるところである。例えば、前半部の越中に下向する具体的な描写部分に、次のようにある。

……あをによし 奈良山過ぎて 泉川 清き河原に 馬留め

別れし時に ま幸くて 我帰り来む 平らけく 斎ひて待て
と…… (三九五七)

本より実体験を踏まえてのことでもあったのだろうが、卷十三・三二四〇

……奈良山越えて 真木積む 泉の川の 速き瀬を 棹さし
渡り……幸くあらば またかへり見む……
の表現を思わせる。⁽⁹⁾

また、その冒頭には「天離る鄙治めにと大君の任けのまにまに」とあった。「大君の任けのまにまに」は集中に七例あるが、内五例は家持の例で、⁽¹⁰⁾ 悲緒一首、更贈歌でも用い続けている。しかし家持の創始ではなく先行に二例をみる。卷三・三六九と卷十三・三二九一である。三六九は三六八と対をなし、三六八の「大君の命恐み」に対し三六九は「大君の任けのまにまに」と応ずる。また「天離る」はともかく、「天離る鄙治めに」という成句は極めて限られ、家持周辺以外では二例しかない―注(5)参照―。卷十三・三二九一と卷九・一七八五である。はやくに五味保義氏が指摘された如く（「万葉集卷十三考」『国語国文の研究』第二二号）、この三二九一と一七八五は極めてよく似通っている。⁽¹¹⁾ しかも、一七八五と三六八、六九は極めて関係が深い。三六八、六九の左注からして、万葉の編者はこれらが金村集所出であるところから、

石上乙麻呂の越前任官時の作と捉えようとしているのである。冒頭の家持の表現がこのあたりを念頭に置くことは間違いない。そして、とりわけこの場面で家持が強く意識したのは三二九一だと思われる。⁽¹²⁾

実はこの後、明らかに三二九一を共通の材に家持、池主は贈答を行っているのである。四〇〇六と四〇〇八とのやりとりで、家持の「命持ち立ち別れなば後れたる君はあれども」に対し、池主は「群鳥の朝立ち去なば後れたる我や悲しき旅に行く君かも恋ひむ」と答えているが、これが三二九一を念頭においてのものであること、既に神堀忍氏の御指摘にある(前掲論文)。すなわち、「池主はその典據のなんたるかを暗黙のうちに了解してゐた、といふことにならう。」また、天平勝宝二年に家持は「挽歌」(巻十九・四二二四)で「大君の命恐み鄙離る国を治む」と歌うが、この「鄙離る」も集中これ以外には三二九一にしかみえず、やはりこれから学んだのであろう。尤も、これらの例は当面より後の例ではある。しかし当該の場面でも同様のことは確かめられよう。まず、何としても、用例の限られる「大君の任けのまにまに」と「天離る鄙治めに」が揃うのはこの長歌しかないということである。しかも、「天離る鄙治めに」と大君の任けのまにまに」は、三二九一の「或本に云ふ」方をとり「大君の遣けのまにまに天離

る鄙治めに」となる部分をそのまま倒置した形である。家持が先行例から引く際に、このように転倒してとることは極めて多く、家持の「類句踏襲パターン」とまでいわれる。⁽¹³⁾ しかも、弟歌の末尾には「あしひきの山の木末に」とある。さりげない表現であるが、「木末」はともかく「あしひきの山の木末」とあるのは案外に少なく、集中に五例しかない。内四例は家持の例で、弟歌以外には、巻十八・四一一一、四一三六、巻十九・四一六〇とある。すべて越中時代の歌で、この弟歌の表現が最初となる。そして他の唯一の例は、他でもない三二九一の「或書」の例なのである。更にもう一つ、三二九一中にある「延ふつたの行きの別れ」を家持はこの後すぐ「遊覧布勢水海賦」(三九九二)で、「延ふつたの行きは別れず」と否定表現に変化させ用いてもいる。「布勢水海賦」の表現が直接この三二九一を引くこともまず間違いなからう。「延ふつたの」は集中に五例をみるが、田辺福麻呂の長歌(巻九・一八〇四)だけが「己が向き向き」で、他はすべて「別る」に掛かる。そして「延ふつたの行きの別れ」と続くものは「布勢水海賦」、三二九一の二例に限られ、他は三二九一自身に「或本には『行きの』の句なし」と注記する如く、「延ふつたの別れし来れば」(巻二・一三五)、「延ふつたの別れにしより」(巻十九・四二二〇)と「行き」を伴わない形だからである。

み吉野の 真木たつ山に 青く生ふる 山菅の根の ねもこ
ろに 我が思ふ君は 大君の 遣けのまにまに △或本に云ふ、

「大君の 命恐み」▽ 鄙離る 国治めにと △或本に云ふ、「天離る

鄙治めにと」▽ 群鳥の 朝立ち去なば 後れたる 我か恋ひむ
な 旅なれば 君か憊はむ 言はむすべ せむすべ知らず

△或書に「あしひきの 山の木末に」の句あり▽ 延ふつたの 行きの

△或本には「行きの」の句なし▽ 別れのあまた 惜しきものかも

(卷十三・三二九一)

述べた如く、傍線が家持、波線が池主の引用したと思われる部分であるが、越中時代を通じ家持はこの三二九一の表現・詞句を用い続けているのである。五味保義氏が前掲論文で、「卷十三は家持の手に入つたのみでなく主として贈答歌の粉本とされ……」
といわれたのは同感で、とりわけこの三二九一などはまさしくその「粉本」であつた感が強い。余程家持の琴線に響くものがあつたに違いない。恐らくそれは、三二九一中の官人意識を刺激する様々な新鮮な詞句と、そして赴任する夫を送る妻の切なさという内容が、家持の実感そのものだったからであろう。家持もまた、初めて政治の表舞台にたつ高揚と妻大嬢との別れという切なさをあわせもつての越中赴任であつた筈である。そして、これを初めて用いた弟歌に即すれば、三二九一の「あしひきの山の木末に延

ふつたの行きの別れのあまた惜しきものかも」あたりの描写が、
弟歌中に「泉川清き河原に馬留め別れし時に……」とある如く、書
持との最後の別れを想起させたのであろう。

また、憶良歌の影響はというと弟歌後半・末尾の「割注」の存
在がある。集中、この割注を付したのは憶良と家持だけであり、
「家持は憶良を見做つたのであろう……」と川口常孝氏はいわれ
る（「死者の生—家持と池主—」『大伴家持』。短歌三九五九の「せ
ば……まし」の形も家持自身、亡妾歌(卷三・四六八)で用いてもい
たが、内容的にはやはり憶良の「日本挽歌」の反歌(卷五・七九
七)にもっとも近いであろう。⁽¹⁴⁾

歌日誌の最初の長歌、弟歌にも既に、卷十三・憶良の影響を確
認する次第である。ならば、果たして、池主はこういった家持長
歌の傾向をどのようにとらえていたのであろうか。一でみた如く、
池主がこのあたりの家持長歌を一通り目にしているなら、これほ
ど顕著な傾向に無頓着な筈はなく、当然何らかの応接があつて然
るべきだとも思われる。

更贈歌の後半部に対して池主は次の如く応じる。

娘子らが 春菜摘ますと 紅の 赤裳の裾の 春雨に には
ひひづちて 通ふらむ 時の盛りを いたづらに 過ぐし遣
りつれ (三九六九)

春の野に すみれを摘むと 白たへの 袖折り返し 紅の
赤裳裾引き 娘子らは 思ひ乱れて 君待つと うら恋すな
り (三九七三)

家持の「春菜摘ますと」に対し、池主がすかさず「すみれを摘む」と答えたのは、共に山部赤人歌(巻八・一四二四、一四二五、一四二七)を念頭に置きつつのことであつたこと、橋本達雄氏に詳しい御論がある(「山柿」拾穂の論)。いわれる通りであろう。

また、この家持の表現部分が、憶良の「哀世間難住歌」(巻五・八〇四)を踏まえることについては、先の吉井・神堀論文を始め諸注に御指摘がある。この点については、池主はどうとらえていたであろうか。丁寧に応じてはいるが、「答え歌」である敬和歌なら、更贈歌の表現にそのまま即して答えることも可能だろう。しかし、池主の答えには「白たへの袖折り返し」とある。これは更贈歌にはないが、前の悲緒一首中に「衣手を折り返し」とあり、これと関連があらうこと先にも触れた。

「袖折り返し」―或いは「袖返し」―は、この池主の例以外には、家持に二例(巻十七・三九七八、巻二十・四三三二)、他には三例あるが(巻十一・二八一二、二八一三、巻十二・二九三七)、すべて恋しい人を夢にみるための呪術であつた。また、悲緒一首の「衣手を折り返し」は他には巻十三・三二七四しか見当たらず、

これを参考にしたに相違ないが、⁽¹⁵⁾この場合も同様の呪的動作であつた。しかし、池主の「袖折り返し」はあくまで袖口が汚れないためのものであつた筈。⁽¹⁶⁾だとすると、この例は呪的動作ではない。「袖折り返し」唯一の例となる。しかしこれは、池主にすればたまたまそうなつたというべきだろう。恐らく、池主は八〇四の別案にある「白たへの袖振りかはし」を強く意識し、それに悲緒一首の「衣手を折り返し」をあわせ、「白たへの袖折り返し」と応じたのであろう。歌意は無論、春陽のびやかな野遊びの様子を描き家持を慰める点にあつたが、同時に、こういった手際を示す意図もあつたであろう。やはり、池主も家持の踏まえる八〇四を知つていたのである。

それでは巻十三については如何であろうか。敬和歌には「里人の我に告ぐらく」とある。先に、家持の弟歌「：我に告げつる」との関連を指摘した部分であるが、或いはこれなどは同時に巻十三をも意識してはいないだろうか。というのも、「里人」は集中に散見するが、⁽¹⁷⁾この成句となるとこれ以外には巻十三・三三〇三にしか例をみないのである。この長歌、部立では相聞に入るものの、「もみち葉の散りまがひたる」等は冥界の具体的描写ともとれ(『古典全集』)、『万葉考』以来多くは「挽歌」とする。こういった「挽歌的」な長歌を引くのは、やはり弟歌を意識してのこと

であろうか。その反歌三三〇四に「聞かずして黙もあらましをな
にしかも君がただかを人の告げつる」とあるのは、何か弟歌の三
九五八「：白雲に立ちたなびくと聞けば悲しも」を引継ぎ答える
ような気もするし、三三〇三のいわゆる「川渡り」の描写「：黒
馬に乗りて川の瀬を七瀬渡りて：」も、弟歌中の「：泉川清き河
原に馬留め別れし時に：」に通うものも感じられる。三三〇三の
「夫」を「弟」に置きかえれば、そのまま弟歌への答えにもなる
う。

尤も、部立はあくまでも相聞であった。居駒永幸氏によれば、
この長歌が相聞歌とみなされた有力な根拠は「黒馬に乗りて」と
いう詞句にある妻訪いのイメージだといわれる。⁽¹⁸⁾池主もそのイメ
ージ故に用いたのであろうか。行ってしまった夫を思い悲しみ嘆
く妻の姿は、そのまま都に妻を残してきた家持の心境に——とりわ
け悲緒一首に顕著であったが——通いもするだろう。恐らく直接は、
弟歌中の「里を行き過ぎ：我に告げつる」「：白雲に立ちたなび
くと聞けば悲しも」あたりの表現の連想から、何より家持が夥し
く引く卷十三に詞句の引用を求めたというのが、実際ではなかつ
たか。

同様の例と想定し得るものがもう一つある。「古ゆ言ひ継ぎ来
らし」とある表現である。これは更贈歌にはないし、悲緒一首、

弟歌にも関連のありそうな詞句は見当たらない。集中で眺めて、
「古ゆ人の言ひ来る」(卷六・一〇三四)、「古もかく聞きつつか」
(卷七・一一一一)といった表現は目につくものの、これをそのま
ま「古ゆ言ひ継ぎ：」とあるのは卷十三・三二五五しかない。尤
も、これとて「古ゆ言ひ継ぎけらく」で、池主歌が「：来らし」
と推定を使うのとは若干差異があるが、同じ例として扱ってよい
だろう。⁽¹⁹⁾この後「恋すれば苦しきものと」と続き、敬和歌の口ぶ
りとも似るし、「娘子らが心を知らに」と片恋の歌であることも、
更贈歌後半の「娘子」、恋歌風の調子にも沿う。

しかも、敬和歌の短歌三九七四には「我が思ふ君はしくしく思
ほゆ」とあり、三二五五の反歌三二五六にも「しくしくに思はず
人は」とある。また、三九七五には「我が背子に恋すべながら」
とあるが、三二五五のもう一つの反歌三二五七にも「恋ひてすべ
なみ」とある。この「しくしく(に)」はこれ以前に家持、池主に
使用例は見当たらず、また、「恋すべながら」と「恋ひてすべな
み」は『古典全集』二四一二の頭注にある如く、共に「理由」を
表し具体的な使用例も極めて近い。当該の例以外では共に二例を
数えるのみで、⁽²⁰⁾「恋すべながら」の二例(卷十一・二四一二、卷十
二・三〇三四)は「我妹子に」、また、「恋ひてすべなみ」も「我が
背子に」(卷十・一九一五)、「我妹子に」(卷十一・二八一二)と続

き、三二五七(三三二〇)のみが文末に置かれる例である。

更贈歌の「今日もしめらに恋ひつつそ居る」に対し、池主は三二五七の「恋ひてすべなみ」から、「我が背子に：」の形を想起し、より臨場感のある「恋すべながり」を用いるに至ったのではなからうか。勿論、この「しくしく」の用例は他にも相当数あるし、⁽²¹⁾意味・用法がいかに似通うにせよ、「すべながり」と「すべなみ」の差異はやはり差異である。しかし、「古ゆ言ひ継ぎ来らし」が他には三二五五にしかないこととあわせて考慮するならば、池主が三二五五を参考にしたことの傍証ぐらいにはなるのではなからうか。

「里人の我に告ぐらく」は弟歌の表現を意識しつつ、また「古ゆ言ひ継ぎ来らし」は更贈歌後半の話題にあわせながら、巻十三から引いたのであろう。このことは何より、池主が家持長歌の巻十三への接近を確実に把握していたことに他ならない。

こうみてくると、家持の「大君の任けのまにまに」に対し、池主が「大君の命恐み」と答えた冒頭の応接も、或いは、直接は巻十三・三二九一の「或る本」の「大君の命恐み」を踏まえつつのことではなかつたらうか。⁽²²⁾勿論、「大君の命恐み」は「大君の任けのまにまに」に比べ用例も多く、その引用を三二九一に定める確たる根拠はない。巻三・三六八〜六九の唱和もこの場合の贈答

を思わせもする。しかし、「古ゆ言ひ継ぎ来らし」「里人の我に告ぐらく」が巻十三から引いたものであるなら、冒頭にその端緒をみたくもなるのである。現にこの後、四〇〇八で、池主は確かにこの三二九一を把握し中心の歌材として贈答をなしている。この時点で池主が家持の引く三二九一を了解していることはむしろ自然ではあるまいか。

敬和歌は更贈歌、悲緒一首、弟歌を視野に入れるのみならず、更贈歌が引く憶良歌、赤人歌、そしてこの期の傾向である巻十三にも応じ、家持長歌に文字通り密着していたのである。そして、ここまで緊密な対応は、歌を作る際の細々とした具体的な事情について、家持から池主への教示・披露等があったことすら伺わせる。単なる贈答であらう筈がない。

三 敬和歌と述恋緒歌

この「緊密な対応」を今度は家持側からみておきたい。この後、歌日誌は「述恋緒歌」(巻十七・三九七八〜八二二へと続くが)以下恋緒歌と記すし、左注に「三月二十日夜裏に、忽ちに恋情を起こして作る。」とある如く、十五日間の空白を持ち、それまでの作とは一線を画すべきにもみえる。『全注』には「……三月五日の三九七七に至って一応の終結を見る。」とある。また『私注』に

は、「税帳使に決定したので、急に妹が戀しくなつたのかも知れぬ。」と、来るべき帰郷への期待が恋緒歌制作の動機だとする。共に、それまでの贈答歌群と恋緒歌の間に明らかな段差を認めておられるのである。

恋緒を述ぶる歌

妹も我も 心は同じ 比へれど いやなつかしく 相見れば
常初花に 心ぐし めぐしもなしに はしけやし 我が奥妻
大君の 命恐み あしひきの 山越え野行き 天離る 鄙治
めにと 別れ来し その日の極み あらたまの 年行き反り
春花の うつろふまでに 相見ねば いたもすべなみ しき
たへの 袖返しつつ 寝る夜落ちず 夢には見れど 現にし
直にあらねば 恋しけく 千重に積もりぬ 近くあらば 帰
りにだにも うち行きて 妹が手枕 さし交へて 寝ても来
ましを 玉梓の 道はし遠く 関さへに 隔りてあれこそ
よしゑやし よしはあらむそ ほととぎす 来鳴かむ月に
いつしかも 早くなりなむ 卯の花の にほへる山を よそ
のみも 振り放け見つつ 近江道に い行き乗り立ち あを
によし 奈良の我家に ぬえ鳥の うら嘆けしつつ 下恋に
思ひうらぶれ 門に立ち 夕占問ひつつ 我を待つと 寝す
らむ妹を 逢ひてはや見む (三九七八)

池主の「敬和歌」をめぐって

確かにこの恋緒歌では、それまで顕著であつた憶良歌・卷十三長歌との類似は俄に影をひそめ、卷四、六、八あたりの自歌及び周辺歌との影響が多く感じられる。長歌中頃の「近くあらば：関さへに隔りてあれこそ」は、自歌卷六・一〇三六をそのまま述べたもので（『古典全集』）、後半部の「いつしかもくになりなむ」の形も既に卷八・一四四八、一四七八で家持は用いている（『全注』）。また、「夕占問ひ」は卷四・七三六に、末尾の「逢ひてはや見む」は卷四・七六八に「行きてはや見な」とあつた。共に以前に家持が大嬢へ贈つた歌である。更に、短歌三九八一の「遠けども心し行けば」の表現も丹生女王が父旅人に贈つた歌、卷四・五五三にあつた。

長歌の中程には「寝る夜落ちず夢には見れど」と妹に逢えない切なさを「夢」で歌う。この趣向は更に三九八〇、三九八一と、いわゆる波紋型の構成を取りつつ繰り返されるが、この「夢」を用いた表現もかつての家持歌にある。その殆どは恋歌で、とりわけ大嬢へは五首を数える。²⁴『私注』に「歌は自らの舊作なども織りこんで……」とある如く、妹への思いを述べることはそのまま、家持にとって手慣れた自歌・恋歌の世界に帰ることでもあつたのだろう。しかしならば、恋緒歌とそれまでの池主との贈答歌群との間に確たる断層を認め得るかという点、それも性急に過ぎよう。

長歌の前半に「大君の命恐みあしひきの山越え野行き」とある。これまでの家持長歌はすべて「大君の任けのまにまに」を用いていた筈。ここで急に「大君の命恐み」を使ったのは、無論三二九一の詞句を念頭に置きつつも、直接には、敬和歌の「大君の命恐み」に影響されたのであろう。⁽²⁵⁾ というのも、その後の「あしひきの山越え野行き」も、敬和歌の「あしひきの山野障らず」をそのまま言いかえた形だからである。家持自身の長歌でも、「山川の隔りてあれば」(弟歌)―「あしひきの山坂越えて」(悲緒一首)―「あしひきの山きへなりて」(更贈歌)とはあったが、「山野」は用いてはいない。

同様に、「しきたへの袖返しつつ」もこの場合は自己の行為であるが、これは敬和歌の「白たへの袖折り返し」に悲緒一首の「衣手を折り返しつつ」を加味し変化をつけたのであろう。この成句も集中にはこれしか見当たらない。また冒頭では、妻を「心ぐしめぐしもなしに」と歌っているが、これも敬和歌末尾には「心ぐしいぎ見に行かな」とあったところ。そういえばこの歌語、以前やはり春の頃に、大嬢から家持に宛てた歌にもあった。

春日山 霞たなびき 心ぐく 照れる月夜に ひとりかも寝む
(巻四・七三五)

或いは、敬和歌の詞句からこの歌あたりへの連想があったのかも

知れない。恋緒歌は直接敬和歌から歌語・表現を取り込んでいたのである。

先の「夢」にしてもこの恋緒歌の直前、家持が池主に贈った三九七七に「恋ひけれこそば夢に見えけれ」ともあった。この三九七七は三九七六と共に、敬和歌短歌三九七四く七五に対して更に贈ったものである。⁽²⁶⁾

山吹は 日に日に咲きぬ 愛しと 我が思ふ君は しくしく
思ほゆ (三九七四)
我が背子に 恋ひすべながら 葦垣の 外に嘆かふ 我し悲
しも (三九七五)

咲けりとも 知らずしあらば 黙もあらむ この山吹を 見
せつつもとな (三九七六)
葦垣の 外にも君が 寄り立たし 恋ひけれこそば 夢に見
えけれ (三九七七)

この贈答の「余韻」が恋緒歌にも漂っているだろう。三九八一の「遠けども心し行けば」は先に触れた如く、巻四・五五三によつていたが、結句「心し行けば夢に見えけり」は、この三九七七「恋ひけれこそば夢に見えけれ」の延長線上にあるだろう。また、三九八〇の「ぬばたまの夢にはもとな」とあるのも、単に歌語からすれば、三九七六の「見せつつもとな」に三九七七の「夢に見

えけれ」をあわせたようにもみえる。⁽²⁷⁾

ぬばたまの 夢にはもとな 相見れど 直にあらねば 恋止

まずけり (三九八〇)

あしひきの 山きへなりて 遠けども 心し行けば 夢に見
えけり (三九八二)

このあたり、恋の表現のこととて類想・類歌が多く目につくところでもある。諸注に指摘の如く、家持の三九七六も卷十・二二九三の「秋萩」を単に「山吹」に変えただけの歌であった。そして池主の三九七五の類歌として、『古典集成』では卷十二・三〇三四をあげられる。或いは受け取った家持側からすれば、夢を歌う、卷十一

我妹子に 恋ひすべながら 夢に見むと 我は思へど 寝ね

らえなくに (二四二二)

の連想もあつたのかも知れない。⁽²⁸⁾ かつて自歌で用いた恋の表現としての「夢」、或いはこういった類想歌をめぐらせながら、家持は三九七七で「夢に見えけれ」と歌つたのであろう。そして、それを導き出す直接のきっかけは敬和歌短歌であった。

ところで、敬和歌の卷十三の詞句の引用について、家持はどのように感じていたのであろうか。みたところ、恋緒歌には卷十三との顕著な関連は感じられない。ただ三九七九には「心もしの

に」とある。⁽²⁹⁾

あらたまの 年反るまで 相見ねば 心もしのに 思ほゆる

かも (三九七九)

この例を含め、集中に九例を数えるが、これに先立つ例としては人麻呂の卷三・二六六、湯原王の卷八・一五五二、そして作者未詳の卷十一・二七七九、卷十三・三二五五の四例である。この表現「人麻呂に始まるものごとく」ということだが(『全注』)、人麻呂は「いにしへ」を思い、湯原王は秋の季節感を歌う。直接、恋の思いとして歌うのは卷十一・二七七九、卷十三・三二五五の二例のみである。

海原の 沖つ繩のり うちなびき 心もしのに 思ほゆるか
も (二七七九)

……刈り薦の 心もしのに 人知れず もとなそ恋ふる……

(三二五五)

二七七九の下二句とは同形であるし、このあたりを参考にしたのであろう。そして、もう一つの三二五五は敬和歌で池主がよつたと思われる歌であった。

恋緒歌にはまた「よしゑやしよしはあらむそ」とある。家持の使用例はこの一例に限られるが、やや珍しい例である。『時代別国語大辞典上代編』によれば、「よしゑやし」は逆説仮定の「ト

モ」と呼応するか、或いは「意思の表現に呼応し……」とある。ところがこの場合は呼応関係を持たず、「挿入句的なものとして解くべきもの」といわれ、このような例は他には一例しかない³⁰。また、手立て・手段の意の「よし」は、普通「よしもなし」と否定か、「よしもがも」と願望にいうのに、「よしはあらむそ」と肯定に用いた例は他にはみえない。俄に高まった妻への思いがこういった表現を招いたのではあろう。しかしこのあたり、もし池主が引く三二五五〇五七に家持が気付いていたとするなら、「それを知らむよしのなければ」に対し「よしゑやしよしはあらむそ」と応じたともみえる。すなわち、池主が三二五六「しくしくに思はず」から敬和歌短歌三九七四で「しくしく思ほゆ」と肯定に引いたのに倣い、家持も「よしのなければ」から「よしはあらむそ」と同じく肯定で応じたというわけである。憶測が過ぎようか。

これら以外でも、恋緒歌中にあつた「夢にはもとな」(三九八〇)―前の池主に贈つた三九七六にも「見せつつもとな」とあつた―、「現にし直にあらねば」、「直にあらねば」(三九八〇)は、三二五五にも「もとなそ恋ふる」、三二五七「直に来ず」とあつたところ。尤も、これらは恋歌常套の詞句で、何もこの三二五五〇五七に直接の例を求めるとなかなからう。しかし、以上の例を勘案するなら、やはり、家持は池主の敬和歌が引くこの長歌に気

付いていたのではなからうか。

古ゆ 言ひ継ぎけらく 恋すれば 苦しきものと 玉の緒の
 継ぎては言へど 娘子らが 心を知らに ぞを知らむ よし
 のなければ 夏麻引く 命かたまけ 刈り薦の 心もしの
 人知れず もとなそ恋ふる 息の緒にして(卷十三・三二五五)
 しくしくに 思はず人は あるらめど しましくも我は 忘
 らえぬかも (三二五六)
 直に来ず こゆ巨勢道から 石橋踏み なづみぞ我が来し
 恋ひてすべなみ (三二五七)

※傍線部は敬和歌、波線部は恋緒歌に関連のある詞句

また、恋緒歌には、それまでの自身の長歌の表現が使われてもいた。「しきたへの袖返しつつ」は、そもそも悲緒一首の「衣手を折り返しつつ」からの流れに沿うものであつたし、「別れ来しその日の極み」は「来し日の極み」と弟歌に、「下恋に」は悲緒一首に、短歌三九八一の「あしひきの山きへなりて」もそのまま更贈歌にあつたところ。あたかも敬和歌がこれら家持長歌を視野に入れているのに触発された如く。

それまでの家持・池主の贈答歌群とは離れてあるかにみえる恋緒歌が、実は、制作の実際において池主の敬和歌中の歌語・表現を引き、想を得ていること。しかも、池主が敬和歌で引いた卷十

三・三二五五を意識していると思われる節もある。恋緒歌に敬和歌直接の影響を確認するのである。

結び——歌日誌の流れ——

歌日誌を顧みるなら、ここにきて妹への憧れを歌う恋緒歌が現れるのは必然の流れでもあった。越中赴任の間もなく書持の悲報が届き、その後家持も枉疾に沈むことになる。ようやくにそれらを乗り越えつつあったころ、家持は更贈歌を池主へ宛てた。果たして、その前半部には書持の死・自身の病・妹への思いがさりげなく込められ、そして後半では春への憧れから“紅の娘子”を歌う。この娘子の描写も決して唐突なものではなかった。

更贈歌に先立つ池主との贈答で、春の景物への憧れは、漢序の「春朝春花、流馥於春苑、春暮春鶯、囀声於春林。」(三九六五序)といった表現に溢れ、池主からの返事「紅桃灼々、戲蝶廻花儂、翠柳依々、嬌鶯隱葉歌。」(三九六七序)により更に高められていった。とりわけ、この池主の漢序がよる遊仙窟(『古典全集』)のイメージが大きく寄与していることも事実であろう。春への憧憬の中に具体的に娘子をおく幻想は、これらによって一層膨らんでいったに違いない。しかして、その核になったのは、悲緒一首にあった妻大嬢のイメージであった。悲緒一首の妻の描写「妻の命も

：いつしかと嘆かすらむそ」が更贈歌では「嘆くそら安けなくに思ふそら苦しきものを」と「ぼかされ」、その代わりに“紅の娘子”が登場した点を見逃してはならない。春景への憧れと娘子の幻想は、具体的表現としては“春の野遊び”の描写として定着する。それに際して娘子は、憶良歌から“紅の赤裳裾引く”娘子を借り、“若菜摘み”の表現は、家持にとって身近な巻八の赤人短歌を用いたのである。

このあたりの制作事情を熟知していた池主は、家持長歌は勿論、それによる憶良歌・赤人歌・巻十三にまで立ち至り応じた。敬和歌前半でのさり気ない慰め、そしてとりわけ後半の「娘子らは思ひ乱れて君待つととうら恋すなり」、恋歌仕立ての短歌三九七四〇七五が家持の大嬢への思いを格別に刺激したのである。しかも、池主はこれらを山吹の花に添えて贈った³¹⁾。池主の配慮にいたく感動した家持は、更に三九七六〇七七を贈る。これまた恋歌そのもので、池主へ宛てつつも同時に、自身の妹への思いを助長させたことは想像に難くない。三月二十日の夜、池主との贈答の片片を眺める内に、帰郷の期待と相まってそれこそ俄に妹への思いが募っていったのであろう。

僅か一カ月前には、「息だにもいまだ休めず年月も幾らもあらぬに」(悲緒一首)と嘆いていたのが、恋緒歌では「あらたまの年

行き反り春花のうつろふまでに」と、移り行く時の感慨が歌われている。悲緒一首・更贈歌で「せむすべのたどきを知らに」とやり場のない鬱情が述べられているのに対し、ここでは「相見ねばいたもすべなみ」とは歌うものの、「よしゑやし……」以降では妹に逢うことの期待感が膨らんでいつている。その「よしゑやし」にしても、悲緒一首の「玉梓の道をた遠み間使ひも遣るよしもなし」、更贈歌の「玉梓の道の遠けば間使ひも遣るよしもなみ」に對して、「玉梓の道はし遠く関さへに隔りてあれこそよしゑやしよしはあらむそ」と応じてもいるのである。そして、これらの間に確たる位置を占めるのが池主の敬和歌であつた。

歌日誌でみるなら、敬和歌はそれまでの弟歌、悲緒一首、更贈歌を一旦柔らかく受け止め、恋緒歌へと導いていつている。敬和歌は更贈歌に対する答え歌にとどまらず、その前の悲緒一首、弟歌、そして後の恋緒歌とも極めて密着していつたのである。越中時代の家持にとって、歌友池主の存在が重要であつたことは論を待たないが、長歌贈答という實際の場において、確かにその役割を確認するのである。

天平十九年のふたりの長歌贈答はまだその端緒についたばかりである。

注

- (1) 例えばこの点、『全註釋』は更贈歌を全篇一文とし、また『全註』でも「段落ははつきりしていない。」といわれている。
- (2) 『全註釋』は敬和歌を六段に、『全註』では五段に分ける。細かな差異はともかく、家持長歌に對し、池主長歌がいかにも断片的である印象の保証にはなろう。
- (3) 卷四・六七二(安倍虫麻呂)にも同様の例がある。また、全体の調子はかつて大嬢が家持に宛てた卷四・七三八にも似ている——大越寛文氏『大伴家持の類歌類句』——。
- (4) この点の指摘『全註釋』『古典全集』『全註』等にある。とりわけ『古典集成』にははつきりと「以下二句は三九六三を承ける。」とある。
- (5) 集中に五例、内三例は家持・池主の例(卷十七・三九五七、三九七三、三九七八)、他に卷九・一七八五、卷十三・三二九一がある。但し、池主の例は「鄙治めに」ではなく「鄙も治むる」とある。
- (6) 「転換期の家持——『臥病』の作をめぐって——」『日本上代文学論集』。但し、氏は八句全体で妻・家への思いを込めているとされる。
- (7) 諸注に指摘があるが、特に川口常孝氏「死者の生——家持と池主——」(『大伴家持』)には「急使の派遣には、あるいは池主の

配慮が働いていたかも知れない。」とあり、このあたりのこと詳しく述べておられる。

(8) 氏は、悲緒一首については、卷十三・三三二九、三二七四、三三三六、また更贈歌については、三三二九、三三三六、三二九七、三二七〇の影響を指摘され、更に、更贈歌には、三二九九、三二七二も影響の一つとしてあげられる。

(9) 大越寛文氏『大伴家持の類歌類句』にもこの指摘がある。卷十三は、伊藤博氏が古代国郡図式に則りながら歌を配列していると説かれた如く(『古典集成四』解説等)、「道行き」の表現は目につくが、当該の例が最も近い。

(10) もう一例、家持に「大君の任きのまにまに」(卷十八・四一六)とある。

(11) 共に官命を受け赴任する夫を送る妻の気持が歌われ、細部にまで類似の表現が及ぶ。『古典集成』にも類想歌としてあげられる。

(12) この点、『全注』には「どちらかと言えば卷十三の歌を学んでいるらしい。」とある。

(13) 橋本達雄氏「二上山の賦をめぐって」『大伴家持作品論攷』。また『全注』にも同様の御指摘がある。

(14) 諸注、他にも額田王歌(卷二・一五一)をあげる。

(15) 神堀氏も家持の当該部分の類似表現として三二七四と三三二

九の二例をあげておられる(「家持における長歌―越中守時代を中心に―」)。

(16) 尤も、これも恋の呪術とする『窪田評釋』のような立場もないわけではない。

(17) 池主のこの例も含め集中十一例ある。卷十、卷十一、卷十三に多い。

(18) 「死者との出逢い―万葉集卷十三・三三〇三の挽歌的表現構造―」『明治大学教養論集』三三二二号。また、『私注』には「本来は挽歌であつたものを、別れた配偶者を対象とする相聞に轉訛し、ついでそれに應ずる反歌を附加されたのかも知れぬ。」と詳しい。

(19) この点、『古典全集』には「ここはむしろ『言ひ継ぎ来らく』の誤りとみるべきか。」とある。或いは、池主が「来らし」としたのは三二五五を意識してのことではなかったらうか。また、こういった「告ぐらく」「言ひ継ぎけらく」等の「引用型式」は憶良・家持・池主、虫麻呂歌集、そして卷十三・三三〇三、三二四、三二五五に見られるという御指摘が遠藤宏氏にあり、参考になる(「万葉集卷十三歌考―相聞・問答を中心として―」『国語と国文学』五三卷五号、『古代和歌の基層―万葉集作者末詳歌論序説―』に収載)。

(20) 「恋ひてすべなみ」はもう一例、三三二〇があるが、これは

三二五七とほぼ同じ形であるので一つに扱う。

- (21) 「しくしく思ほゆ・思ふ」の形に限れば、卷二・二〇六、卷七・一二三六、卷八・一六五九、卷十一・二四五六、二五五二、卷十二・三二〇〇とある。

- (22) 尤も、「大君の任けのまにまに」と「大君の命恐み」はニュアンスに差異があり、前者が「アクティヴな精神」なのに対し、後者は「受動的・パッシヴな感覚」と小野寛氏はいわれる（「大君の任のまにまに―家持の『ますらを』の発想―」『大伴家持研究』）。ならば、ここで池主が「受動的な感覚」の「大君の命恐み」を用いたのは、家持に対する「下僚意識」が働いたといったこともあろうか。

- (23) 渡瀬昌忠氏「柿本人麻呂における贈答歌」『美夫君志』第十四号。

- (24) いずれも卷四の歌で、大嬢には五例（七四一、七四四、七四九、七六七、七七二）、童女に一例（七〇五）、娘子に三例あり（七一六、七一八、七八四）、すべて恋歌である。もう一例、これは藤原久須麻呂に宛てた例がある（七八七）。

- (25) この点、小野寛氏にも（注22同書同論）、「池主が家持への贈歌に『大君の命かしこみ』と歌った影響か、あるいは京に残して来た妻への恋情が心弱くさせたのであろうか。」とある。

- (26) 『古典集成』に「池主の贈歌のうち、長歌が家持の三九六九

に密着して答えるものであったため、ここでは反歌二首だけに對する答歌を返したのであろう。」とある。確かに、三九七六は「山吹」で三九七四と、三九七七は集中この例しかない枕詞「葦垣の」を共通項に、三九七五と密着している。

- (27) 尤も集中に「夢」を「もとな」と歌う例も三例ほどみえる―卷十二・三一六二、卷十四・三四七一、卷十五・三七三八―。
- (28) また、「衣手を折り返し」―「白たへの袖折り返し」―「しきたへの袖返し」と続いて来た表現に着目するなら、次のような類想歌も想像してみたくなる。

我が背子が袖返す夜の夢ならしまことも君に逢ひたるごとし
 (卷十一・二八一三)

白たへの袖折り返し恋ふればか妹が姿の夢にし見ゆる
 (卷十二・二九三七)

或いは、「山吹」「赤裳裾引く娘子」からすれば、次の歌あたりは如何か。

山吹のにほへる妹がはねず色の赤裳の姿夢に見えつつ
 (卷十一・二七八六)

- (29) これが初出、この後、卷十九・四一四六でも用いている。

- (30) 卷十一・二六五九に「よしゑやしよそふる君が」とあり、当該例の口調に通うものがある。

- (31) この「山吹」の思い出が、天平勝宝二年の「詠山振花歌」(卷

十九・四一八五)を起点とする歌群に直接投影していること述べたことがある。拙稿「家持の『山吹の花を詠む歌』をめぐって」『國學院雜誌』第九十二卷四号。

報 告

○萬葉学会代表の交替について

小島憲之代表から辞任の申し出があり、慰留につとめたが辞意はかたく、やむをえずこれを認めた。後任について、委員会内に代表推戴小委員会を設け、その議を経て、伊藤博委員を推戴することに決し、昨年の大会終了後をもって交替とした。

小島前代表には昭和四十三年以来、二十四年の長きに涉り、学会の中心として広く全体の指導にご尽力いただいた。厚く御礼申し上げます。なお、今後も委員には留まっていたくことをお願いし、了承をいただいた(次項参照)。

○新たに名誉会長を設け、学会代表を退かれた方を遇することとなった。

小島憲之前代表を名誉会長に推戴した。

○なお、以上に伴う会則上の整備は、現在進行中である。

付記 本稿は平成三年度萬葉学会全国大会(於光華女子大学)で口頭発表したものの一部である。雑駁な発表にもかかわらず、伊藤博氏、神野志隆光氏、神堀忍氏、芳賀紀雄氏、渡瀬昌忠氏から懇切・丁寧な御教示を賜った。記して謝意を込めたい。

(おおこし よしふみ・東京都立国立高等学校教諭)

○萬葉学会第四十五回全国大会（十月三日～六日）

第一日

*公開講演会（午後一時～五時三十分）於国立高岡短期大学講堂

司会 西宮一民委員

挨拶

高岡市長 佐藤孝志氏

講演

古事記における表記の性格—訓仮名表記をめぐって—

聖心女子大学教授 山口佳紀氏

萬葉集あれこれ—枕詞「味凝」のことなど—

関西大学教授 木下正俊氏

家持の「学」—越中在任中の詩歌をめぐって—

学会代表 小島憲之氏

前日よりここ高岡市では「万葉まつり」が開かれている。その最大の催しは、驚くべし、六十時間を費やして『万葉集』四五一六首を一六〇〇人の人々が朗誦する会であるという。祭りのさんざめきをわずかに離れて、萬葉学会講演会は高岡短期大学において定刻開始された。最新設備の組み込まれたおしゃれな円形劇場のごとき講堂である。

講演者はお三方。山口氏は『古事記』の訓仮名の例を詳細に確かめられつつ、その表記のあり方が、『古事記』読解の便宜のた

めに、想像以上に工夫が施されている点を主張された。木下氏は『万葉集』の「味凝」「不可顯事」「於吾欲得」の三点について、それぞれ独自の訓みと解釈をまことに歯切れのいい考証で明らかにされた。学会代表小島氏は、当地高岡における大伴家持の文学の環境を、立体的にまた諄々と滋味あふれる口調で語り尽くされた。会場を埋めた多くの聴衆の醸しだす雰囲気は、「万葉まつり」の高揚に学的緊張を加えたまことに濃厚なものであった。

*懇親会（午後六時三十分～八時三十分）

於ホテルニューオータニ高岡

ほぼ百名の大きな宴となった。代表、市長、そして講演者の挨拶と続き、高岡市議長の音頭で、乾杯。本年も司会を坂本信幸、渡辺護両委員が担当した。司会両名の例年の目標は集われたすべての方にお話をしていただくという到底無理なものである。その間に、高岡市の要人の方々から拝領のお酒もたっぷりいただかなくてはならぬ。遠大な計画と自らの願望で司会は大忙しの大汗をかいたのである。しかし、ずい分たくさんの方々のお話をいただいた。お顔を見る楽しみ、お話を聞く楽しみ、そして歓談相とよもして和やかに宴は果てた。古城公園における万葉の朗誦は三十五時間を経てまだ続いている。

第二日

***研究発表会**（午前十時〜午後五時） 於国立高岡短期大学講堂

天平勝宝八歳六月十七日大伴家持作六首について

京都大学大学院生 奥村和美

赤人の印南野行幸従駕歌―「不欲見野」をめぐって―

東京大学大学院生 上田由紀美

野遊の歌四首

土浦短期大学 三田誠司

以上 司会 村田正博委員

日本靈異記上巻の書式について―金剛三昧院本の誤写から―

帝塚山学院大学 乾 善彦

二音節助動詞の一部読添え 皇学館大学 大島信生

以上 司会 蜂矢真郷委員

旋頭歌における叙述の主体をめぐって

聖心女子大学 品田悦一

人麻呂歌集非略体歌七夕歌群―七夕以前の数首について―

実践女子大学 渡瀬昌忠

以上 司会 井村哲夫委員

講演会に同じ講堂である。朗誦の会は六十時間をもって研究発表

表会の一時間前に終了しているはずである。午前の部三人、午後

の部四人、あわせて七名の方の発表が相次いだ。内容は懸命の探

究の努力と万葉の学的情熱にあふれかえって会場はなおも静謐。

講演会とは違い、質疑応答が加わって、さらに厳しい緊張を伴う零囲気である。萬葉学会の研究発表会は恐いほどの厳正さをもつてなるとおっしゃる方が多い。なるほどそのとおりで、本年は終始司会からの指名発言、皆無であった。むしろ司会の苦心は質量共に豊かすぎる質疑応答をいかに時間内にまとめあげるかという点に費やされた。不足をあげつらうばかりでは厳しいとは言えない。質問の内容を見れば、不足は不足として指摘しつつも、発表者の言わんとするところ、最も価値ある部分を発見しようという意に満たされていたと思われる。研究発表が厳しい緊張に満ちて有益だとすれば、それはそのような質問者の発見の努力に負うところも大きい。

夕刻、両日の晴天の後の待ちかねたような北国の雨であった。

第三日

***萬葉研修旅行(一)**

高岡駅―万葉歴史館―国庁跡―国守館跡(勝興寺)―

二上山―布勢水海―氷見(昼食)―桜谷古墳―雨晴海

岸―奈呉の江―宇奈月温泉(宿泊・ホテル黒部)

参加者六十四名

案内と解説 万葉歴史館 古岡英明氏・北世博氏

前日より引き続き雨の中、萬葉研修旅行が高岡駅前より出発し

た。総勢六十四名、一泊二日の同行である。万葉歴史館古岡氏、北世氏お二人の懇切のご説明をいただきつつ行く幸せな旅となった。万葉歴史館が最初の見学予定地。「万葉まつり」もさることながら、高岡の人々の家持を中心とする万葉への熱情がひしひしと感じられる施設である。国庁跡、国守館跡を巡り、越中二上山にバスは上る。風雨止まず。布勢の海、氷見を経て、昼食。海近い桜谷古墳を見学。雨晴の海岸を経て、最終見学地である奈具の江と向かう。途中、引退せし帆船、海王丸の雄姿あり。泊まりは黒部の宇奈月温泉。夜、夕食を兼ねた懇親会。研修旅行の嬉しさは、東京、大阪、九州などのこの旅行を熱愛して下さるグループの方たちの参加である。その方々のお話をうかがえば、萬葉学会の本質が奈辺にあるかを改めて知ることが出来る。

第四日

*萬葉研修旅行(二)

宇奈月温泉——(北陸高速)——芦峯寺(休憩)——桂台——

立山・室堂(昼食)——立山博物館——富山駅

旅行第二日、宇奈月温泉出発。雨あがりて快晴。北陸高速をひたすらに走り、芦峯寺で休憩。さらに桂台を経て立山室堂へとバスは向かう。家持がふり仰いだ立山の頂上を目指すのである。したがって前日と違い、歌そのものの勉強というものはない。少々

呑気にバスに身を任せ、雄大な自然を楽しむのみである。日本一高い(料金も)という有料道路に乗る。途中にわか霧深くなる。下界よりすればこれは雲中に当たる。路肩にバスを留め、称名の滝を遠望。遙かかなた霧の間に称名の滝見え、瀑布の音わずかに伝わる。先頭車両の人々、歎息して滝を望み、写真など取り、後続車の人たちに場所をあける。瞬時霧再び閉ざして、滝音のみ。称名の声のみ聞く人々はいかなる因果にや。霧中をさらに高みへ。室堂付近に近づいて、一気に雲の上へと突き抜けた。地元のガイドが驚嘆するほどの、お山は晴天。一昨日の初雪いまだ残る。頂上を散策、そして昼食。雪上、雷鳥の足跡(?)、這松の繁みへと続くも、ゆかし。自然を満喫してやがて下りへと向かう。午後、立山博物館。改めて立山があつい信仰の山であるということを感じする。心地よい疲れと共に、富山駅へと向かった。午後五時、定刻どおり駅頭にて解散。萬葉学会全国大会第四十五回、すべて終了した。学会四日間にあたり、暖かいお世話を下さった万葉歴史館の方々をはじめ、高岡の皆様から感謝しつつ、家路へと就いたのである。(渡辺 護記)

下村とし	713	倉敷市玉島阿賀崎1864	086-525-5060
杉之原寿美	720	福山市久松台1-22-27	0849-24-8492
簾勇司	451	名古屋市西区上名古屋2-2-21 第1城北ハイツ301号	052-522-1229
瀬尾照代	720	福山市沖野上町6-2-31-105	0849-31-2276
坪井清子	700	岡山市当新田250-1 当新田マンション403号	086-241-1833
友杉博子	701-12	岡山市大窪770-51	086-284-1848
難波道子	720	福山市水呑町1615(玉泉寺)	0849-56-0659
福海實	933	高岡市南田町178	0766-21-6188
部谷千代子	720	福山市北吉津町3-24-25	0849-23-4745
宝諸玲子	720	福山市三之丸町12-4	0849-23-3957
宮岡弥生	729-01	福山市柳津町2310	0849-33-3221
宮長宗子	720	福山市桜馬場町10-40	0849-23-8057
森下幸男	780	高知市横内417	0888-43-6646
山本サダ子	720	福山市水呑町2349	0849-56-0718
山本久子	720	福山市赤坂町1093-1	0849-51-5465
湯浅五月	721	福山市西深津町7-3-4	0849-24-5004
吉川明美	720	福山市北吉津町1-2-16	0849-24-0212
吉原久枝	720	福山市久松台1-22-27	0849-26-2600

変更(改姓・変更・表示を含む)

梅木裕	690-21	島根県八束郡八雲村日吉333-127	
小川靖彦	181	三鷹市井口5-1-13 藤コーポ105号	0422-34-5414
原田貞義	981	仙台市青葉区三条町4-11 三条宿舎6-101	022-274-7669
三田誠司	333	川口市戸塚東3-28-24-207	048-297-1476
宮岡薫	631	奈良市二名4丁目1193-126	0742-43-9019
吉村誠	753	山口市錦町7-21	0839-24-8262

会 員 名 簿 補 訂

氏 名	☎	住 所	電 話 番 号
新入会員			
洗 井 孝 枝	703	岡山市平井6丁目23-23	086-276-3543
安 藤 智 佳 子	564	吹田市円山町8-8 CASA'88・105号	06-387-0305
池 島 和 子	700	岡山市昭和町4-3	086-256-0403
石 井 勝 江	703	岡山市徳吉町1-4-8-312	086-272-6027
石 原 淑 子	700	岡山市津島西坂2-11-31	086-252-5028
市 南 京 子	518	上野市長田1191	0595-23-0495
井 ノ 口 史	612	京都市伏見区深草大亀谷万帖敷町181-5	075-643-7133
井 山 温 子	593	堺市新家町777-1 白鷺ビューハイツ209号	0722-36-5619
岩 野 圭 子	277	柏市西山2丁目10-19	0471-74-9105
岩 本 裕 子	001	札幌市北区北34条西9丁目 けいほくコーポラス205号	011-756-2082
上 西 雅 子	720	福山市本町7-5	0849-24-8233
内 山 道 子	721	福山市坪生町1087	0849-47-3115
枝 松 百 合 子	703	岡山市福泊10-13	086-277-0928
大 島 知 子	720	福山市光南町2-2-2	0849-23-2633
岡 田 チ サ 子	720	福山市水呑町4221-11	0849-56-4631
岡 本 雅 彦	630	奈良市法蓮町南2丁目1147	0742-22-8441
小 川 理 恵	181	三鷹市井口5-1-13 藤コーポ105号	1422-34-5414
荻 原 貴 美 子	720-11	福山市駅家町向永谷107	0849-76-2360
奥 田 可 奈	491	一宮市柳戸町1-19-3	1856-24-0456
奥 村 和 美	615	京都市西京区桂良町17-55 ルブラン内	075-392-3562
河 相 英 子	720-21	広島県深安郡神辺町道上879-2	0849-62-1075
川 島 寿 美	715	井原市大江町5227	08666-7-1272
木 村 美 子	720	福山市水呑町5031	0849-56-3652
楠 木 千 尋	113	東京都文京区本郷5-32-18-203	03-5684-3873
佐 藤 登 志 子	720	福山市山手町1567-23	0849-51-5968
下 江 晶 子	720	福山市久松台2-17-11	0849-24-7253
下 江 光 恵	720	福山市久松台2-17-11	0849-24-7253

平成五年一月三十一日発行

萬

葉

頒価

七百五十円

送料三十一円